

# 箱崎 41

—箱崎遺跡第63次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1094 集

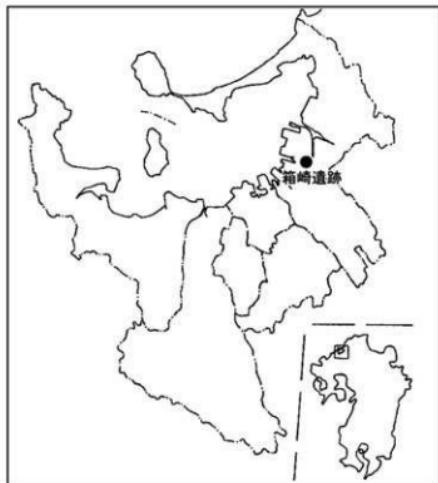
2010

福岡市教育委員会

HAKO                    ZAKI  
箱                    崎 41

—箱崎遺跡第63次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1094 集



遺跡番号 HKZ-63  
調査番号 0826

2 0 1 0

福岡市教育委員会



## 序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、箱崎公民館および老人いこいの家複合施設の建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第63次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に平安時代から鎌倉時代の中世集落跡を確認すると共に、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、箱崎地区の地域の皆様や本市市民局をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が公民館等施設建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2704外において発掘調査を実施した箱崎遺跡第63次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、令達事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつき・坂口剛毅が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$  西偏する。
9. 遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
10. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
11. 本書で記述する遺物の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。  
山本信夫「統計上の土器 - 歴史時代土師器の編年研究によせて -」  
『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年

- 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年を中心として -」  
『九州歴史資料館研究論集 4』1978年  
太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』(太宰府市の文化財第49集)2000年
12. 本書に掲載した銅錢の保存科学処理およびX線写真撮影は、福岡市埋蔵文化財センターの上角智希が行った。
  13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、同センターに保管される予定である。
  14. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	第63次	遺跡略号	HKZ-63
調査番号	0826	分布地図幅名	箱崎34	遺跡登録番号	022639
申請面積	1,526.8m <sup>2</sup>	調査対象面積	560.3m <sup>2</sup>	調査面積	506.2m <sup>2</sup>
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2704、2706-2、2706-5			事前審査番号	19-1-65
調査期間	平成20(2008)年7月17日~10月15日				

## 本文 目 次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
II. 遺跡の立地と環境.....	2
III. 調査の記録.....	6
1. 概要.....	6
2. 遺構と遺物.....	7
1) 井戸(SE) .....	8
2) 土坑(SK) .....	25
3) ピット(SP) 出土の遺物.....	35
4) その他の遺物.....	40
3. 結語.....	44

## 挿 図 目 次

第1図 箱崎遺跡位置図(1/25,000) .....	3
第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000) .....	5
第3図 調査区位置図(1)(1/1,000) .....	6
第4図 調査区位置図(2)(1/500) .....	7
第5図 SE001 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/1、1/3、1/5) .....	8
第6図 調査区全体図(1/150) および北西壁面上土層実測図(1/60) .....	(折り込み)
第7図 SE004 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3) .....	9
第8図 SE011 実測図(1/40) .....	10
第9図 SE011 出土遺物実測図(1/3) .....	11
第10図 SE012 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	12
第11図 SE013 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	14
第12図 SE014 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	15
第13図 SE016 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	16
第14図 SE017 実測図(1/40) .....	17
第15図 SE017 出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	18
第16図 SE018 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	19
第17図 SE020 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	20
第18図 SE021 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	21
第19図 SE023 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	22
第20図 SE024 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	23
第21図 SE025 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4) .....	24
第22図 SE027 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/1、1/3) .....	25

第23図	SK002 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2, 1/3) .....	26
第24図	SK003・004・005・007 実測図(1/40) .....	27
第25図	SK003・004・005・007 出土遺物実測図(1/1, 1/3) .....	28
第26図	SK009 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1)(1/3) .....	29
第27図	SK009 出土遺物実測図(2)(1/2, 1/3, 1/4) .....	30
第28図	SK010 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2, 1/3) .....	31
第29図	SK019 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3) .....	32
第30図	SK026 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1)(1/3) .....	33
第31図	SK026 出土遺物実測図(2)(1/3) .....	34
第32図	SK266 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/2, 1/3) .....	36
第33図	ピット出土遺物実測図(1)(1/2, 1/3) .....	37
第34図	ピット出土遺物実測図(2)(1/2, 1/3) .....	39
第35図	ピット出土遺物実測図(3)(1/4) .....	40
第36図	遺構検出時他出土遺物実測図(1) (1/3) .....	41
第37図	遺構検出時他出土遺物実測図(2) (1/2, 1/3) .....	42
第38図	遺構検出時他出土遺物実測図(3) (1/1) .....	43

## 表 目 次

第1表 箱崎遺跡調査一覧表 .....	4
---------------------	---

## 図 版 目 次

図 版 1	(1) 調査区西側全景(北西から) (3) 調査区南東部全景(南西から)	(2) 調査区東側全景(北西から)
図 版 2	(1) SE001(北東から) (3) SE011(北西から) (5) SE012(北から)	(2) SE006(北から) (4) SE011 井筒(北西から) (6) SE013(北から)
図 版 3	(1) SE014(南西から) (3) SE017(北西から) (5) SE020(南西から)	(2) SE016(南から) (4) SE018(南東から) (6) SE021(南西から)
図 版 4	(1) SE023(北西から) (3) SE025(北西から) (5) SK002(北から)	(2) SE024(南東から) (4) SK002 土層(北東から) (6) SK004(北から)
図 版 5	(1) SK007(南西から) (3) SK010(北西から) (5) SK026(北西から)	(2) SK009(北西から) (4) SK019(北東から) (6) 調査区周辺風景(西から)
図 版 6	出土遺物	

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市市民局コミュニティー推進部公民館整備課長より平成 19(2007) 年 9 月 7 日付、公整第 513 号にて、同市教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課長宛に東区箱崎 1 丁目 2704、2706-2、2706-5( 敷地面積 : 1,526.8 m<sup>2</sup> ) における箱崎公民館・老人いこいの家複合施設建設事業に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼がなされた ( 事前審査番号 : 19-1-65 ) 。なお、この事業は、同敷地内の公民館および老人いこいの家の老朽化したため、解体後、新たに複合施設として新築する工事である。

これを受けた埋蔵文化財第 1 課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから同年 10 月 18 日、既存建物解体前に空き地部分を対象とした確認調査を実施し、地表下約 1.5 ~ 1.7 m の黄褐色砂層上面で中世と考えられる遺構や遺物を確認した。この調査成果をもとに両課で協議を行なった結果、建物建築部分については杭打設工事を行う必要があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、当該建物の建築面積 560.3 m<sup>2</sup> を対象とした記録保存のための本調査を平成 20 年度に、整理・報告書作成を翌平成 21 年度に実施することとなった。なお、これらにかかる費用は、事業主体である市民局が負担した。

### 2. 調査の組織

調査委託：福岡市市民局 コミュニティー推進部 公民館整備課

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財第 1 課

調査總括：埋蔵文化財第 1 課長 山口譲治 (20 年度) 濱石哲也 (21 年度)

同課 調査係長 米倉秀紀

調査庶務：同部 文化財管理課 管理係 古賀とも子 (20 年度) 山本朋子 (21 年度)

事前審査：埋蔵文化財第 1 課 事前審査係長 吉留秀敏

同課 主任文化財主事 宮井善朗

同課 事前審査係 文化財主事 星野恵美 (確認調査)

調査担当：同課 調査係 文化財主事 榎本義嗣 (現 同部 埋蔵文化財第 2 課 調査第 1 係)

調査作業：阿部純子 近藤末孝 坂口剛毅 崎村雄介 関哲也 田端名穂子 永松弘恵

中村幸子 名取さつき 野田淳一 花田則子 原勝輝 光安昌子 驚崎哲夫

(九州大学学生) 中牟田寛也 松原雅道

整理作業：木本恵利子 樋口三恵子 松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで箱崎校区自治会連合会、同校区自治協議会、小森輝男箱崎公民館長、市民局公民館整備課をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については遅くとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、第1図の範囲では微高地上に6遺跡が知られる。本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて入り江が博多湾から湧入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。

第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。遺跡北東端部で実施された第10次調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次・53次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、菅崎宮境内、第2次・52次調査区付近までほぼ南北方向に延伸する。砂丘尾根は遺跡南半部では東側に大きく振られるため、砂丘の西側には広い緩斜面が形成される。また、遺跡南東部の第26次調査8区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。該地付近には昭和初期まで水路が遺存していたことからも、從来低地であったと考えられる。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査4区および第26次調査6区付近には標高約3.5mを測る等高線が認められ、更に南側に延伸するものと考えられるが、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側の斜面は殆ど認められない。

また、同図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顕著な堆積物が確認されている。第10次・41次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができる。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列も確認されている。東限については、菅崎土地区画整理事業に伴う調査によりJR鹿児島本線に沿うラインが該当する。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高く、第40次調査19区や第49次調査においても古墳時代以降の遺構が検出されている。また、北側では第36次・61次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても從来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。

本遺跡の発展の契機となったのは菅崎宮の創建で、延長元年(923)に鷦鷯波大分官を遷座したと伝えられる。永承6年(1051)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延6年(1140)には一時大宰府の府領となった。しかし、文治元年(1185)には再び石清水八幡宮からの補任がなされ、この間、仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追捕を行っている。これを記した『宮寺縁事抄』には両地区に宋人が在住していたことや1,600軒以上の家屋が存在したことが記述されており、日宋貿易に関与した宋商人の家屋を含む町が既に該地に形成されていたことを裏付ける。文永11年(1274)の元寇(文永の役)の際には菅崎宮が焼失したことが伝えられており、同地区一帯も被災した可能性が高い。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)、箱崎地区的海岸線に薩摩国の分担によって元寇防星が築かれる。至治3年(1323)に沈没したことが判明している韓国新安沖の沈没船からは「菅崎宮」銘の木簡が出土しており、同宮は該期においても引き続き日本の大陸交易拠点の一つとして位置付けられる。以後の中世後半期においても『海東諸國紀』や『筑紫道記』、『宗湛日記』



第1図 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)

等に箱崎の地名が散見され、海上交通の要所や箱崎松原に代表される名勝地としてもその名を残している。

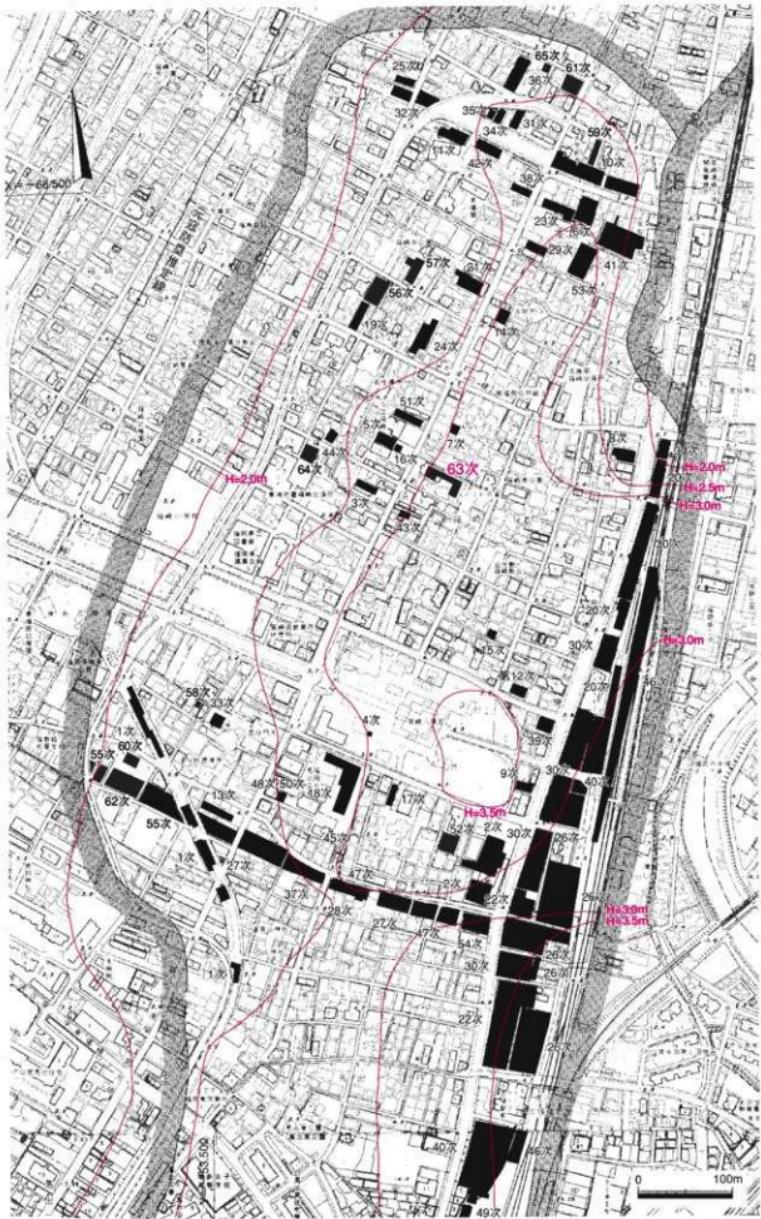
箱崎遺跡では現在までに 65 次の調査が実施されている（第 1 表・第 2 図）。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては、第 6 次調査出土の磨製石斧や第 20 次調査出土の刻目突帯文土器の甕片が挙げられるが、後世の遺構からの出土で、現在のところ最も時期の遅る遺構としては第 30 次調査 16 B 区の弥生時代後期初頭の甕棺墓がある。また、古墳時代初頭では、第 8 次・20 次・22 次・26 次・30 次・40 次調査等において堅穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。第 47 次調査 B 区では、碧玉製管玉の未製品や剥片が出土しており注目される。また、第 40 次調査では砂丘上に築造された 5 世紀代の葺石を有する円墳が確認されている。これらはいずれも砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区であり、古墳時代では自然地形的に安定した環境を選択したことが看取される。

その後、数世紀の断絶が認められるが、菅崎宮創建時の 10 世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第 2 次・22 次・26 次・30 次・40 次・54 次調査区において確認されている。先に述べた砂丘鞍部の在り方等を勘案すると、その具体的な位置は不詳であるが、前述した港湾施設がこれら調査区の東側に存在する可能性が示唆される。11 世紀代では前代のやや拡大した範囲において該期の遺構が確認され、これらは尾根線および東側緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構が密度をもって存在することから中世集落形成の端緒として指摘される。12 世紀中頃からは海側の西側緩斜面の利用も開始され始める。12 世紀後半には遺跡の広範囲に生活域が展開し、鉄造関連の遺物の出土や豊富な副葬品をもつ屋敷墓の確認が報告されている。この時期は箱崎が門前町から都市へと転じていく段階と考えられ、発掘調査成果は先の文献史料が示す都市的な様相とも合致する。13 世紀以降もほぼ全域に遺構が確認されるが、西側斜面を積極的に生活の場として活用している。また同斜面上の北西側を主として、第 11 次・21 次・24 次・51 次・57 次等で確認されている 13 世紀後半代の焼土層は、文永の役に起因する可能性が高く、菅崎宮と併せ一帯の市街地が被災したことが推測される。また、中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。

#### ＜引用・参考文献＞

- ・林 茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1998 年
- ・川添 昭二編『よみがえる中世 I 東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988 年
- ・榎本 義嗣『福岡市所在の箱崎遺跡について』『中世都市研究会 2003 年九州大会資料集』2003 年

調査次回順年次	主な遺構の特徴	概 文
第 1 次	12 世紀半～13 世紀初頭	「高瀬川遺跡」小川町(1980)
第 2 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1987)
第 3 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 4 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1993)
第 5 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 6 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 7 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 8 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 9 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 10 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 11 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 12 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 13 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 14 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 15 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 16 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 17 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 18 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 19 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 20 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 21 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 22 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 23 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 24 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 25 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 26 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 27 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 28 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 29 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 30 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 31 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 32 次	10 世紀半～11 世紀末	「箱崎遺跡」小川町(1992)
第 33 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 34 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 35 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 36 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 37 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 38 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 39 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 40 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 41 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 42 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 43 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 44 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 45 次	12 世紀半～13 世紀初頭	市街地(1993)
第 46 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 47 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 48 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 49 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 50 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 51 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 52 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 53 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 54 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 55 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 56 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 57 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 58 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 59 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 60 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 61 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 62 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 63 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 64 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 65 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 66 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 67 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 68 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 69 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 70 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 71 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 72 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 73 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 74 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 75 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 76 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 77 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 78 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 79 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 80 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 81 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 82 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 83 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 84 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 85 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 86 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 87 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 88 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 89 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 90 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 91 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 92 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 93 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 94 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 95 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 96 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 97 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 98 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 99 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 100 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 101 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 102 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 103 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 104 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 105 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 106 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 107 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 108 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 109 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 110 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 111 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 112 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 113 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 114 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 115 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 116 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 117 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 118 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 119 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 120 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 121 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 122 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 123 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 124 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 125 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 126 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 127 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 128 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 129 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 130 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 131 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 132 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 133 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 134 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 135 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 136 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 137 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 138 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 139 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 140 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 141 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 142 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 143 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 144 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 145 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 146 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 147 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 148 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 149 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 150 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 151 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 152 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 153 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 154 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 155 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 156 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 157 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 158 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 159 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 160 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 161 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 162 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 163 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 164 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 165 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 166 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 167 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 168 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 169 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 170 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 171 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 172 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 173 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 174 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 175 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 176 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 177 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 178 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 179 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 180 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 181 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 182 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 183 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 184 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 185 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 186 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 187 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 188 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 189 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 190 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 191 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 192 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 193 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 194 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 195 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 196 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「箱崎遺跡」市街地(1993)
第 197 次	古墳時代、10 世紀～13 世紀	「



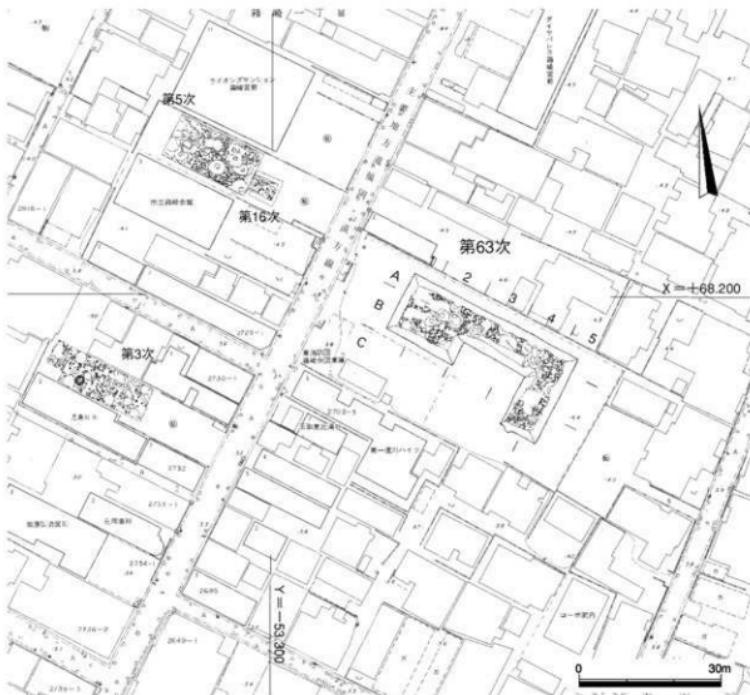
第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)

### III. 調査の記録

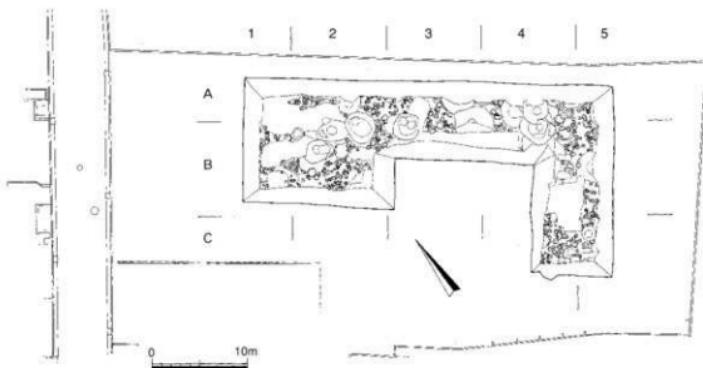
#### 1. 概要

今回報告する箱崎遺跡第63次調査区は、東区箱崎1丁目2704、2706-2、2706-5に所在する。同遺跡の中央部や北寄りに位置し、南北方向に長く延びる古砂丘の尾根線付近に立地している。調査前の状況は、施設解体後の平地で、標高は4.1m前後であった。なお、本調査区の西側の道路を隔てた北西部では、第5次・第16次調査が行われている。

調査区の土層（第6図参照）は、擾乱を伴う表土および客土層（1層）が地表下1m程度まで見られるが、部分的に水平堆積層が残る。2・3層は包含する遺物から近世の堆積層で、4層以下には中世遺物が含まれ、暗灰茶褐色土を主体とする8層上面より大半の遺構が掘り込まれている。以下には9層や砂丘基盤である黄褐色砂層上のほぼ全面に広がる10層が薄く堆積する。基盤砂層は調査区東側ではいわゆるトラ柄状の風成砂であるが、西側では顯著でない。また、調査区内の砂層の標高は2.7～2.8m前後を測り、ほとんど起伏はないものの、僅かに東側部分が高くなっている。よって、本調査区は幅広い砂丘尾根線の西側緩斜面に占地するものと考えられる。今回の遺構検出は、表層から10層上面付近までを重機で剥ぎ取った面で実施した。同層は、基盤砂層と類似するものの、



第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)



第4図 調査区位置図(2)(1/500)

淡灰褐色砂質土が混じる汚れた砂層で、基盤層の上層に5~10cm程度堆積する。なお、遺構プランや重複関係を把握するため、実際には基盤砂層まで人力で掘り下げる、遺構の掘削を行った。

今回の調査では、既存建物の杭や防空壕等の搅乱が砂層以下までおよんでいたが、12世紀から13世紀の多数の井戸や土坑、ピット等を良好に検出できた。出土遺物量は、コンテナケースにして40箱である。なお、調査時の排土を事業地内で処理せざるを得なかつたため、まず、調査対象地東側約1/2の調査を先行し、排土反転後、残る西側の調査を行った。

発掘調査は平成20(2008)年7月17日に着手した。まず、重機による東側部分の表土剥ぎ取りを同日に開始し、重機作業終了後の22日に発掘器材を搬入した。その後、壁面の清掃および養生、ベルトコンベヤや階段の設置、トラバース杭の設定を行い、28日より遺構検出を始めた。その後、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ等の作業を順次進めた。搅乱の除去や井戸群の重複、8月中旬の集中豪雨により時間費やしたが、東側部分調査終了後の9月17日、高所作業車によって全体写真を撮影した。翌日より重機によって排土を反転し、西側部分の表土剥ぎ取りを開始した。25日から同様の人力作業を進め、10月10日に西側部分の全体写真を撮影した。その後、重機による埋め戻しや片付けを行い、15日に発掘器材等を撤収し、第63次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「1.-1.調査に至る経緯」のとおり、敷地面積1,526.8m<sup>2</sup>のうち560.3m<sup>2</sup>であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は506.2m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

## 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置等を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(北から南方向にA、B、C)と数字(西から東方向に1、2、・・・5)

を組み合わせた10m単位のグリッド表記を用いる（第4・6図参照）。

### 1) 井戸 (SE)

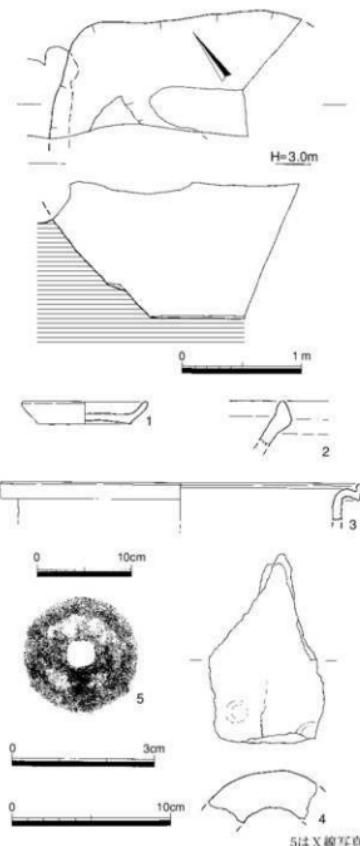
以下に15基を報告するが、井筒を確認できたものは、標高0.6m前後で湧水するため、底面まで掘削ができていない。井筒の下部には木桶を用いた水溜が多用されるが、遺存状況はいずれも不良であった。また、掘り直しにより、重複するものが多く認められた。

**SE001(第5図)** 調査区南東端のC-5区で検出した。隅丸を呈する大形の掘り方が検出されたが、遺構の大半は調査区外に位置する。深さ1.1mで確認した平坦面は、テラス部分と推定され、調査区内で井筒は確認できなかった。覆土は暗灰褐色砂質土を主体に暗黄褐色砂質土が混じる。

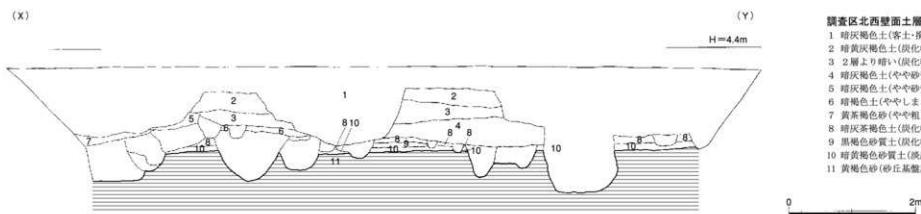
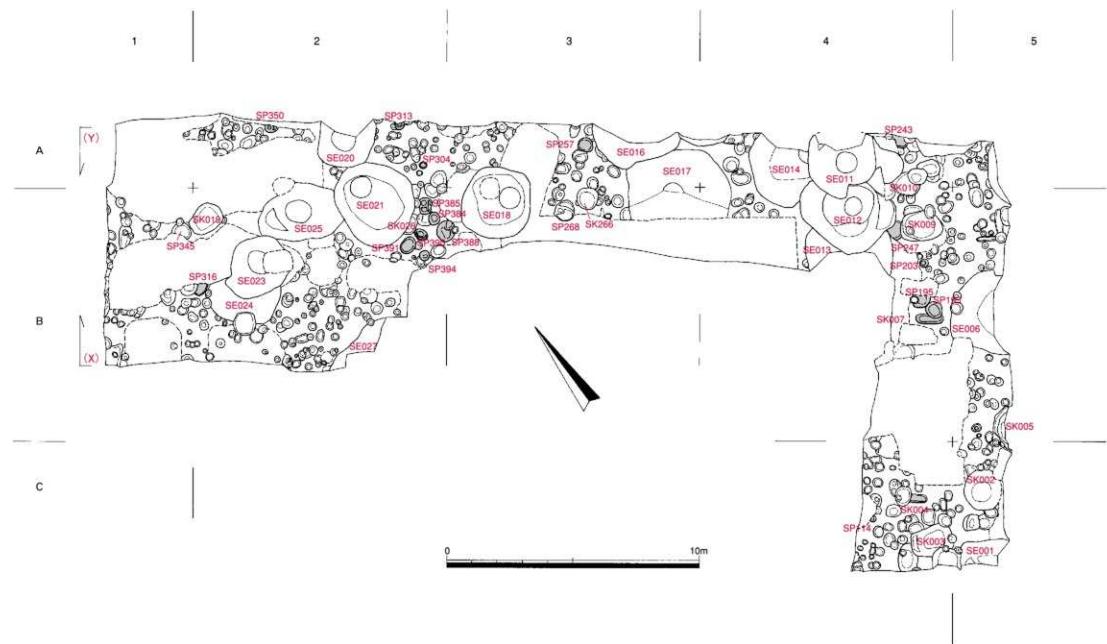
**出土遺物(第5図)** 1は復元口径7.8cmを測る回転糸切り底の土師器小皿である。板状压痕は認められない。2は東播系の須恵質土器鉢の細片で、口縁部は玉縁状を呈する。3は常滑焼の甕である。断面「N」字状の口縁部を有し、小片からの復元であるが、口径は37.6cmを測る。内外面に自然釉が掛かる。4は輪羽口片で、外面を丁寧にナデる。胎土には大粒の砂粒が多く含まれる。5は不鮮明であるが、北宋代の銅錢「至道元寶」(初鑄年:995年)であろう。出土遺物は少量で、他に土師器坏、白磁碗IX類、龍泉窯系青磁碗II類等の細片が出土している。これらから13世紀後半の井戸に位置付けられる。

**SE006(第7図)** B-5区の調査区壁際で確認した井戸で、東側は調査区外に位置する。現況で径約3.3mの不整な円形プランを呈する。上面からの深さ1.15mで平坦面を検出したが、SE001同様に調査区内で井筒は確認できなかった。覆土は上層部分が暗灰褐色砂、下層では黄褐色砂が互層に混じる。

**出土遺物(第7図)** 6・7は板状压痕を有する回転糸切り底の土師器で、6は小皿、7は壺である。復元口径は順に10.0cm、15.0cmを測る。8は低い高台を貼付する瓦器碗で、内面はヘラ研磨を施す。外底部には「×」がヘラ描きされる。9は中国陶器の壺の底部で、外表面は回転ヘラ削り調整を施す。胎土は灰色で、外面の一部に薄く緑灰色の釉が掛けられる。10~13は龍泉窯系青磁碗である。10は碗II-b類で、蓮弁文の鍋が僅かに見える。11~12は碗もしくは小碗III-2c類で、細身の鍋蓮



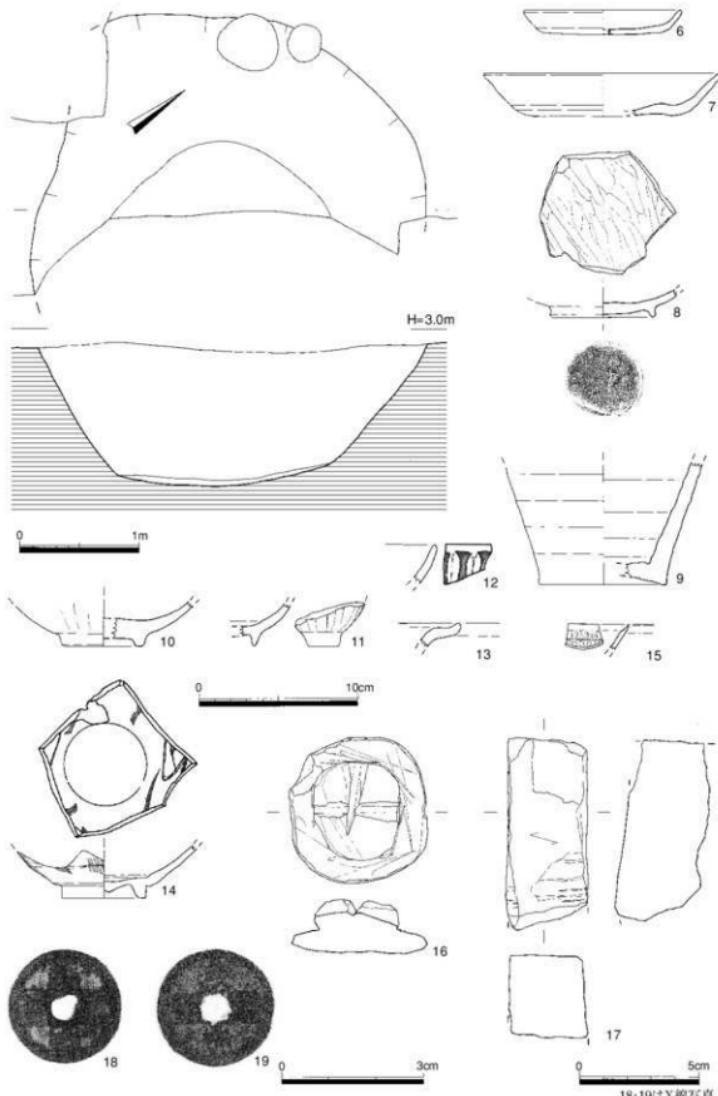
第5図 SE001実測図(1/40)および出土遺物  
実測図(5は1/1、3は1/5、他は1/3)



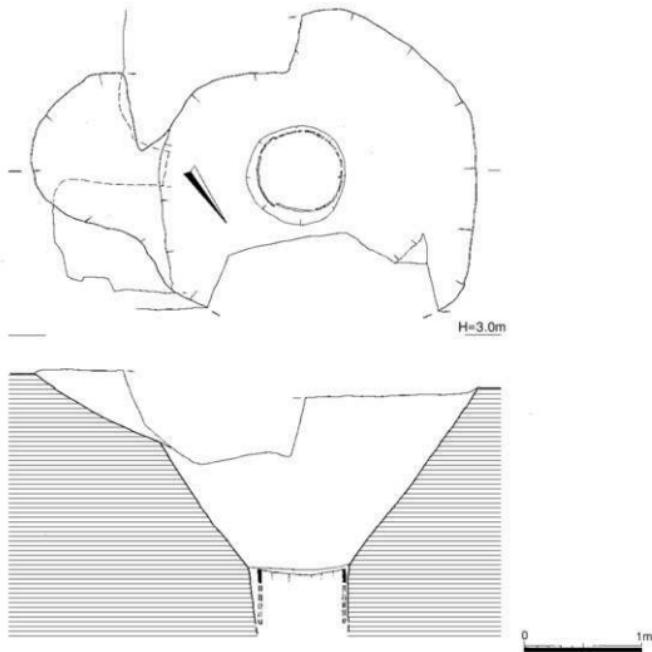
第6図 調査区全体図(1/150)および  
北西壁面土層実測図(1/60)

- 譲渡区北西壁上層

  - 1. 鮎緋色地(土+白+赤)、瓦礫多量含む
  - 2. 鮎緋褐色(土+褐色)、泥炭質土少量含む
  - 3. 黒褐色土(褐色土)、近世植物土少量含む
  - 4. 鮎緋褐色土(土+褐色)、近世植物土少量含む
  - 5. 鮎緋褐色土(土+褐色)、晴天灰褐色土ブロック含む
  - 6. 晴天褐色土(土+褐色)
  - 7. 黄褐色土(土+褐色)、晴天褐色土ブロック含む
  - 8. 晴天褐色土(土+褐色)、泥炭質土少量含む
  - 9. 黑褐色砂質土(褐色土+黄褐色砂質土少量含む)
  - 10. 黑褐色砂質土(泥炭質土少量含む)
  - 11. 崩壊褐色土(崩土+褐色土)



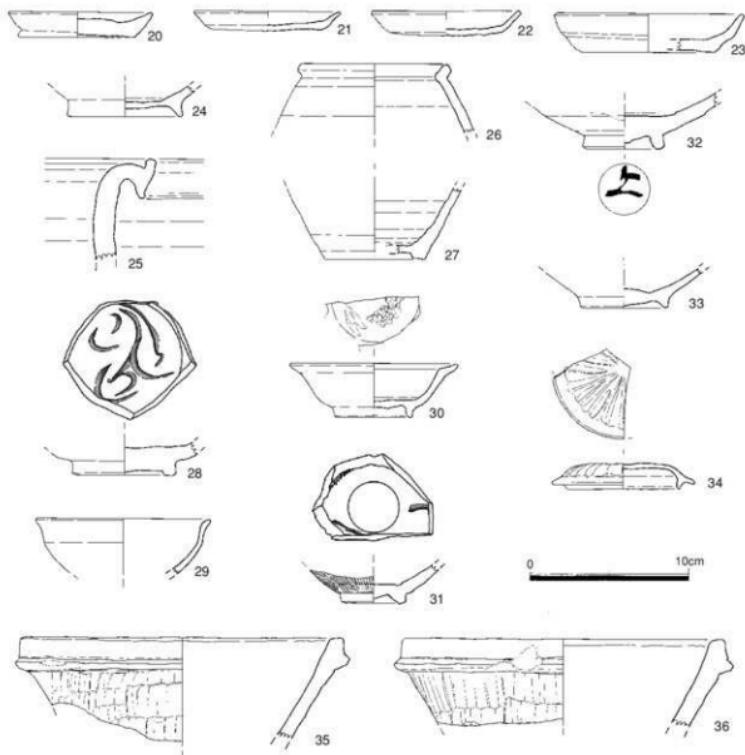
第7図 SE006 実測図(1/40)および出土遺物実測図(18・19は1/1、16・17は1/2、他は1/3)



第8図 SE011 実測図(1/40)

弁文を有する。11の高台は先尖りで露胎となる。12の口縁端部は明褐色に発色する。13は壺III-3類の口縁部片で、端部を上方につまみ上げる。14は同安窯系青磁碗I-1b類で、内外面に櫛状工具による施文を有する。淡緑色の施釉がなされるが、外面下半は露胎である。15は青白磁の碗もしくは皿である。口縁部は口禿げで、赤褐色を呈する。内面には型押しによる施文がある。16は滑石製品で、幅5.7cm、長さ6.2cmを測る隅丸長方形状の基部に径約3.5~4.0cmの楕円形の摘みを削り出す。摘みの上部は欠損するが、紐通しと推定される径0.6cmの孔を十字に設ける。基部の底面は凸レンズ状で、磨耗がすすむ。17は頁岩製の仕上げ砥石で、遺存する3面を砥面として用いている。18・19は銅錢で、18は南唐の「唐國通寶」(初鑄年:959年)、19は北宋の「政和通寶」(初鑄年:1111年)である。他に須恵質土器、白磁碗IV・IX類等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀中頃から14世紀初頭の井戸と考えられる。

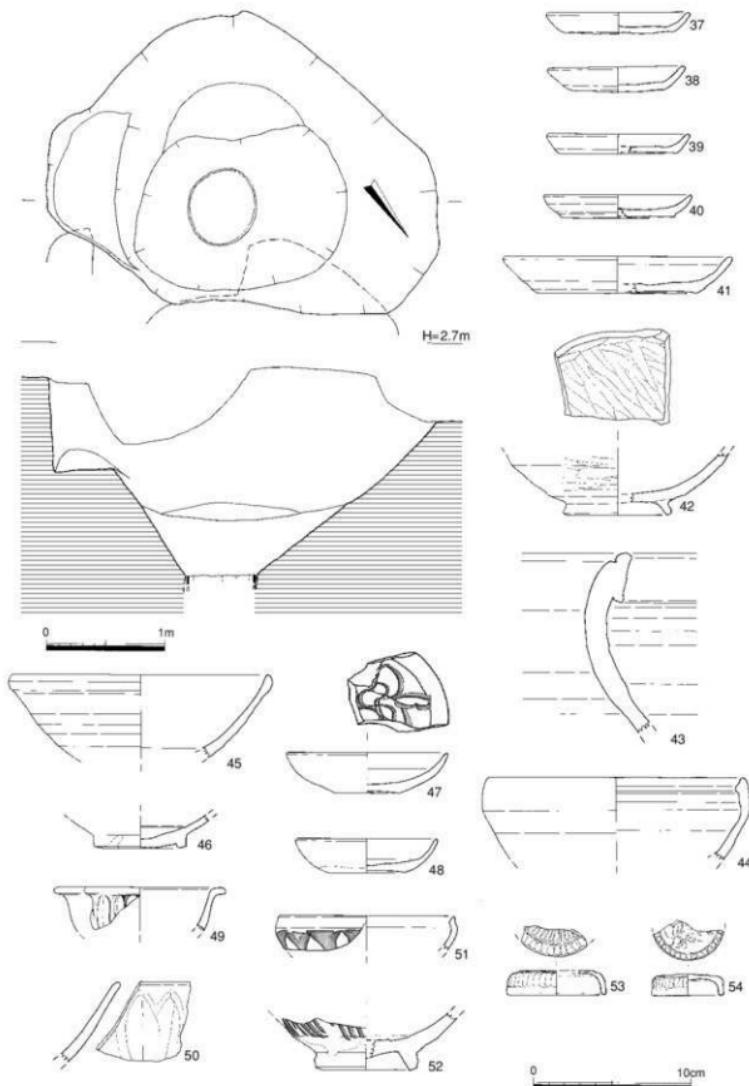
SE011(第8図) A・B-4区に位置し、北側の一部は調査区外に延びる。SE012・013・014を含めた計4基が近接して重複する。SE011はSE012・014を切り、4基の内で最も後出する井戸である。また、南側ではSK010を切る。南側では擾乱により平面プランが不整であるが、長径3.7m、短径は復元で2.7mを囲む楕円形の掘り方を呈する。壁面は底面に向かってすぼみ、深さ1.4mで径0.85



第9図 SE011出土遺物実測図(1/3)

mを測る円形の掘り込みが認められた。その内部は湧水し、腐朽の進行した径0.7mの木桶が水溜として置かれていた。覆土は汚れた暗黄褐色砂と暗灰褐色砂質土が互層をなし、深さ0.4m付近から暗灰褐色土を呈する井筒の痕跡が中央部に認められた。

出土遺物(第9図) 25・36は井筒部分、他は掘り方埋土からの出土である。20～23は回転糸切り底の土師器である。20～22は板状圧痕を有する小皿で、順に口径は9.0、9.2、9.4cmを測る。23は杯で、板状圧痕はない。24は瓦器碗で、外底部に板状圧痕が残る。25は常滑焼の甕で、縁帶部幅2.5cmを測る断面「N」字状の口縁部を呈する。26・27は中国陶器の壺で、26は淡赤褐色の胎土に淡オリーブ灰色の釉が施される。27は輪状高台を有し、褐色釉が内外面に掛けられる。やや硬質の胎土は淡灰色を呈する。28～30は龍泉窯系青磁である。28は碗I類で、見込みに片彫りによる文様を有する。29は小碗III-3類で、口縁部を外反させる。30は見込みに魚文を貼付する杯III-3c類で、高台端部の釉を削り取る。31・32は同安窯系青磁碗で、31はI-1b類、32は見込み



第10図 SE012 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

の釉を輪状にカキ取るIII-2類で、外底部に「上」が墨書きで記される。33・34は青白磁である。33は全面施釉される碗で、見込みの中央部は凸状を呈し、体部との境界には圓線が巡る。34は天井部に型押しの花文を施す蓋で、短いかえりを付す。全面施釉後に口縁部内面の釉をカキ取っている。35・36は滑石製石鍋で、断面台形状の鈎を削り出す。外面にはノミによる削痕を残し、煤の付着が著しい。他に須恵質土器、白磁碗IV類、白磁皿VII・IX類、龍泉窯系青磁碗II類等の細片が出土している。以上から13世紀後半の井戸と推定される。

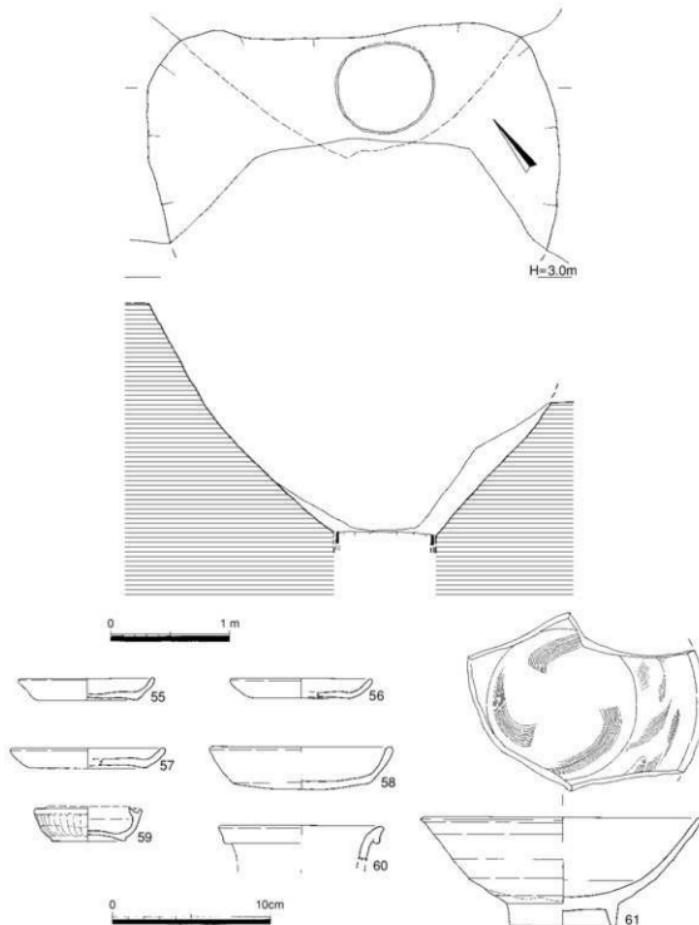
SE012(第10図) A-B-4区で検出した井戸で、北側をSE011に切られ、SE013・014を切る。長径3.2m、短径2.5mを測る不整な梢円形プランをなす。壁面の2箇所にはテラスを設け、底面に向かってすぼむ。湧水する標高0.7m付近には径0.6m前後の木桶が水溜として据えられるが、遺存状況は不良であった。覆土は暗灰褐色砂質土を主体に暗黄褐色砂が混じる。また、深さ約1m付近から粘性のある暗黒灰色を呈する井筒痕跡が確認できた。

出土遺物(第10図) すべて掘り方埋土からの出土である。37～40は口径8.6～9.3cmを測る土師器小皿で、37は回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。37・39を除いて板状圧痕が認められる。41は板状圧痕を有する回転糸切り底の坏で、復元口径は14.4cmである。42は瓦器椀で、内面および体部外面をヘラ研磨する。43は常滑焼の甕で、外面には自然釉が掛かり、灰緑色を呈する。44は中国陶器の無釉捏鉢である。口縁部は内傾し、凹面をなす。胎土には砂粒が多く含み、赤橙色を呈する。45～48は白磁である。45・46は碗で、45は玉縁口縁のIV類、46は見込みが窪み、体部との境界に圓線を配する。釉は青味をおび、豊付きおよび内底部には施釉されない。47・48は皿で、47は見込みに草花文を施すV-1b類である。外底部は露胎である。48は見込みに段状の沈線を巡らせる。外底部は僅かに上げ底で、体部下半以下には施釉されない。49～51は龍泉窯系青磁である。49は坏III-4類で、外面に細身の鎬蓮弁文を有する。50は碗II-b類で、青味のある釉には貫入が多い。51は東口碗II-b類の口縁部である。52は見込みの釉を輪状にカキ取る同安窯系青磁碗III-2類で、外面には幅広の櫛目文を配する。胎土は粗く、黒色粒子が目立つ。53・54は体部に菊弁の型押し文を施す青白磁の合子蓋で、口縁端部および体部内面は露胎となる。53の天井部には菊花文、54には草花文を有する。これらの出土遺物からこの井戸は13世紀後半頃に位置付けられる。

SE013(第11図) B-4区の調査区際で確認した。北側の大半をSE012に大きく切られ、南側は調査区外に位置するが、遺存する東西側の壁面から径3.5m以上の梢円形プランをなすものと考えられる。壁面は底面に向かってすぼみ、深さ1.9mで径約0.8mを測る腐朽の進んだ木桶が確認できたが、その下位で湧水する。覆土は、上層では暗灰茶褐色砂質土が主体となるが、下層では暗黄褐色砂との互層となる。

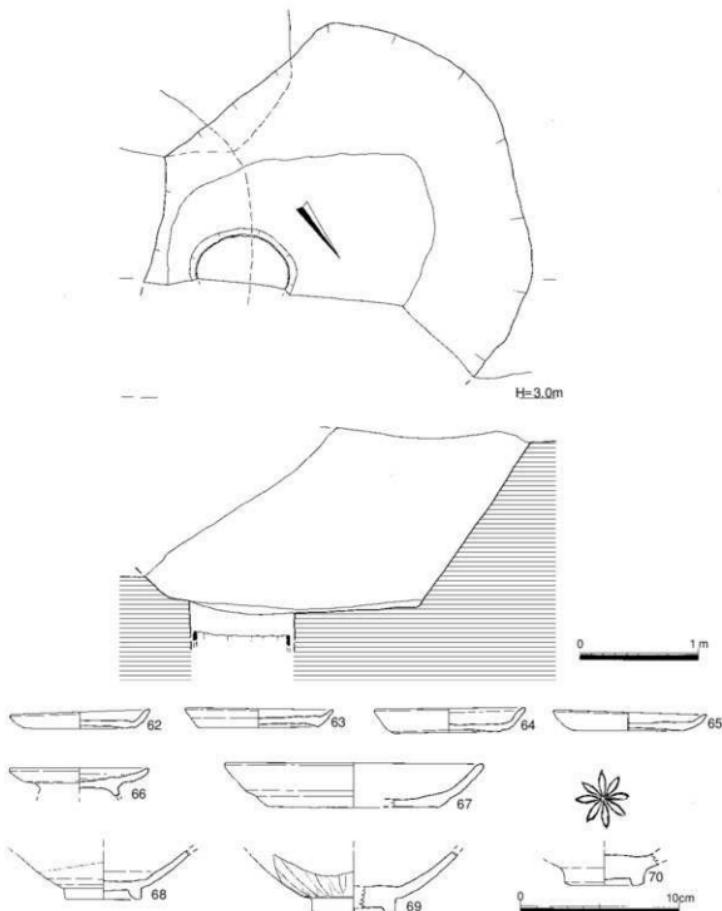
出土遺物(第11図) すべて掘り方埋土からの出土である。55～58は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。55～57は小皿で、復元口径は順に8.5、9.0、9.8cmを測る。58は復元口径11.6cmの坏である。59は青白磁の合子身で、体部外面に菊弁を型押しする。口縁部内面から立ち上がり部および体部外面の下半以下は露胎となる。60・61は白磁である。60は水注もしくは四耳壺の口縁部片で、折り曲げて口縁部を作る。61は碗V-4b類である。口縁端部は鋭く屈曲し、上端部は面をなす。内面には櫛状工具による施文を有する。堅緻な灰色の胎土に灰白色の釉が高台際まで施釉される。口径18.0cm、器高6.9cmを測る。他に中国陶器、龍泉窯系青磁碗I-II類、同安窯系青磁碗等の細片が少量出土した。以上から13世紀前半から中頃の遺構と考えられる。

SE014(第12図) A-B-4区に位置する井戸で、北半部は調査区外に延びる。東側をSE011・012に切られるため、平面プランが不整であるが、遺存する西側部分から径3.5m前後の円



第11図 SE013 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

形もしくは梢円形の掘り方を呈するものと推測できる。上面からの深さ約1.5mに平坦面があり、その東側に井筒下部を据えるための径0.9mを測る円形の掘り込みが認められた。その内部には径0.75m前後の木桶が水溜として設置されていたが、腐朽がすすみ、遺存状況は不良であった。その下位で湧水する。覆土は上層が暗灰褐色砂質土、下層では暗黄褐色砂を主体に灰褐色粘性砂ブロックが混じり、井筒部分では暗灰褐色粘性砂質土が主体となる。



第12図 SE014 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

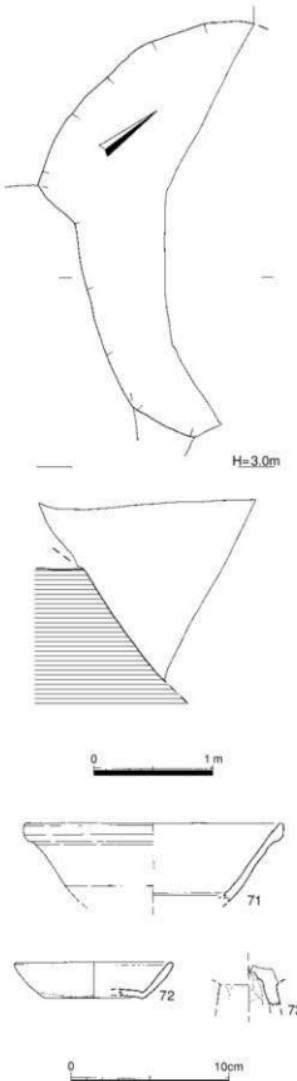
出土遺物(第12図) 65のみ井筒部分、他は掘り方埋土中からの出土である。62～66は土師器小皿である。このうち、62～65の外底部は回転糸切りで、63を除いて板状圧痕が認められる。いずれも完形に近い資料で、口径は8.8～9.6cmを測る。66は復元口径8.8cmの小皿cで、ヨコナデにより高台を貼付する。67は回転糸切り底の土師器坏で、細かい板状圧痕が認められる。復元による口径は16.2cmである。68は白磁碗II-4類で、見込みに段状の沈線を有する。黄味のある灰白色の胎土にややオリーブがかった灰色の釉を薄く施すが、外面下半以下には施釉しない。69・70は

龍泉窯系青磁碗である。69は碗II-b類で、外底部まで施釉がおよぶ。貫入により蓮弁文がやや不鮮明である。70は見込みに花文を印刻し、浅い圓線を配する。淡緑色を呈する釉は、高台際まで掛けられるが、一部が脛付きに垂れる。他に瓦器、須恵質土器、中国陶器、白磁皿VII類、縄目叩き平瓦等の細片が出土している。これらの遺物から13世紀前半頃の井戸に位置付けられよう。

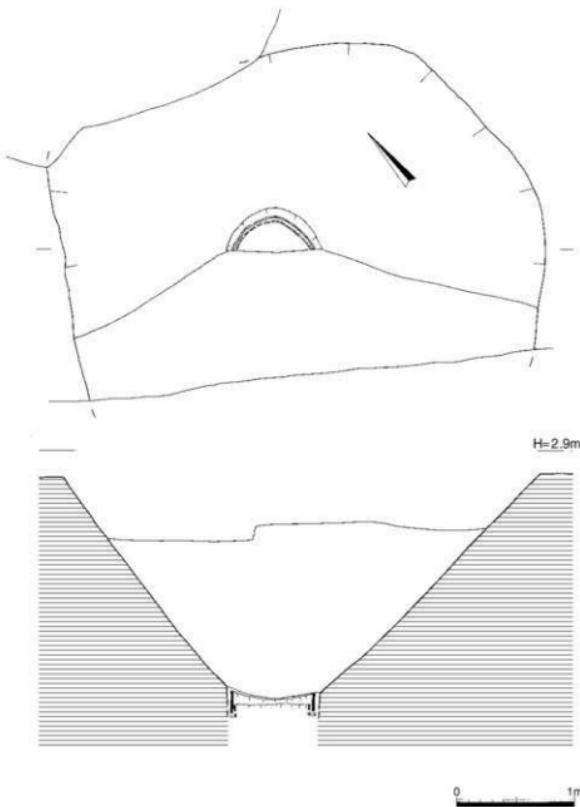
**SE016(第13図)** A-3区の調査区で検出した。南側のSE017を切るが、検出当初、両者の重複関係が不明確であったため、同時に掘削しながら、プランと前後関係の把握に努めた。検出面より約0.5m下がった段階で、切り合いを確認することができた。井戸の北側の大半は調査区外に位置するため、今回調査できたのは、南側の一部であるが、現況から径3.5m以上の円形状の掘り方を呈するものと考えられる。覆土は暗黄褐色砂質土を主体とし、暗灰褐色砂質土を含む。なお、上層では井筒の痕跡と思われるややしまりのある灰褐色砂質土のプランを壁際で検出されたが、安全対策上、法勾配を設けて掘削を行ったため、下層での確認はできなかった。

**出土遺物(第13図)** 全て掘り方埋土中からの出土である。71・72は白磁である。71は玉縁状の口縁を呈する碗IV類で、白色の良好な胎土に乳白色の釉が掛けられる。器面にはビンホールが目立つ。72は皿IX-2類で、口縁部は口禿げである。見込みには深い圓線が巡る。満りのある灰白色の釉は体部外面端近くまで施されるが、外底部は露胎である。73は土師質の土器で、器台の台部と脚部接合部であろうか。指オサエにより調整する。他に回転糸切り底の土師器や白磁碗V-VIII類、龍泉窯系青磁碗II類等が少量出土したが、細片が多い。以上の出土遺物から13世紀中頃から14世紀初頭に比定しておきたい。

**SE017(第14図)** A-B-3-4区に位置し、SE016に北側の一部を切られる。前述のとおり、両者を約0.5m掘り下げて、前後関係が把握できた。径4.0mを測る楕円形状の掘り方を確認できたが、南側は既存建物に伴うコンクリート管が埋設されていたため、未掘となっている。壁面は底面に向かって急傾斜ですぼみ、深さ1.8mで径約0.8mを測る円形の掘り込みを



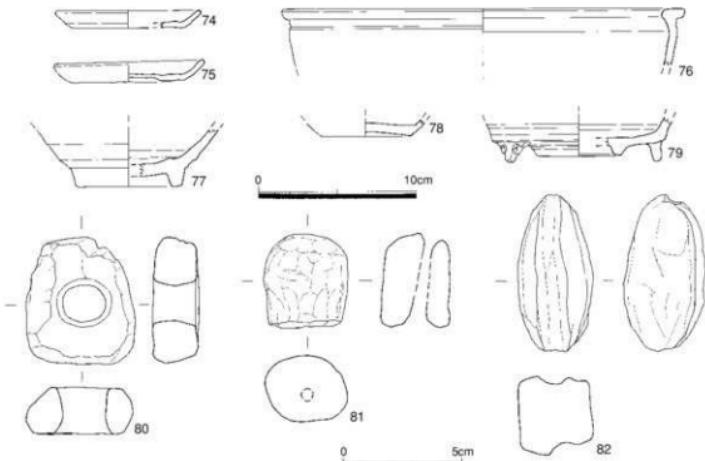
第13図 SE016 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



第14図 SE017実測図(1/40)

検出した。その内部には木質の腐朽がすんだ径 0.7 m 前後の木桶を 2段分確認することができた。井筒の下部および水溜であろう。なお、桶内部を僅かに掘り下げるとき湧水する。覆土は暗黄褐色砂および暗灰褐色砂質土に暗灰褐色粘性土ブロックが混じり、深さ 1.3 m 付近から暗灰褐色粘性砂質土の井筒痕跡が中央部に確認できた。

**出土遺物（第15図）** 全て掘り方埋土中からの出土である。74・75は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、順に復元口径は 9.2、9.5 cm を測る。76は中国陶器の盤である。口縁部外面から内面にかけて黄灰色の釉が薄く掛けられ、外縁の露胎部分は淡赤橙色を呈する。胎土には白色砂粒が多い。77・78は白磁である。77は碗VII-1類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。外縁は露胎で、疊付きには目跡が残る。釉は黄味をおび、細かい貫入がみられる。78は皿IX-1類の底部であ



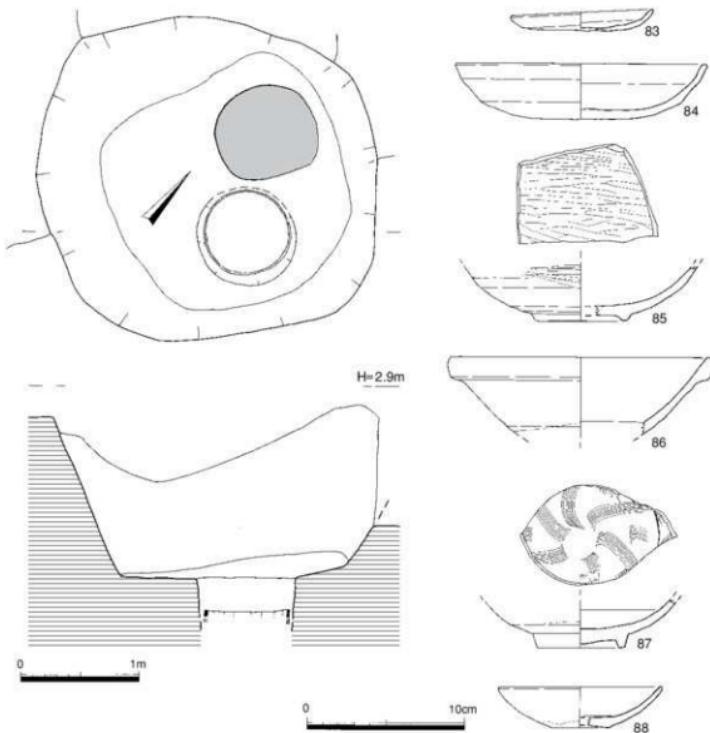
第15図 SE017出土遺物実測図 (80～82は1/2、他は1/3)

る。全面施釉するが、外底部の釉は粗く拭き取る。見込みには段状の沈線が巡る。79は龍泉窯系青磁の香炉片で、満文を両側に配する脚を有する。脚および高台の端部は露胎となり、褐色を呈する。80・81は滑石製石錘である。板状を呈する80は中央に径1.8 cmの孔を有し、側面の一部を欠損する。81は頂部を丸く加工した不整な円筒形をなし、0.6 cmの穿孔が認められる。重量は64.1 gである。82は紡錘形を呈する有構土錘で、重量75.0 gを測る。他に須恵質土器、龍泉窯系青磁碗I・II類、同安窯系青磁等の細片が出土している。これらから13世紀中頃の井戸と推定される。

**SE018(第16図)** A・B-3区に位置する。東西两侧の搅乱により壁面の上位が削平され、北側には既存建物のコンクリート杭が残るが、現況で径2.8～3.1 mを測る不整な円形プランの掘り方が確認できた。深さ1.4 mに平坦面を設け、その東側に径0.8 mを測る円形プランの掘り込みを有する。その内部には径0.7 mの木桶が据えられていたが、湧水により下端を確認できなかった。覆土は上層がやや粘性のある灰褐色砂、下層が暗褐色砂を主体とし、深さ約1.2 mから粘性のある暗灰褐色砂質土の井筒痕跡が認められた。

**出土遺物(第16図)** 全て掘り方埋土から出土した。83・84は回転ヘラ切り底の土師器で、共に板状压痕を有する。83は口径9.0 cmを測る小皿、84は復元口径15.8 cmの丸底杯で、体部内面はコテミガキを施し、外底部にナデを加える。85は低い高台を貼付する瓦器椀である。内外面にヘラ研磨調整を行う。86～88は白磁で、86は玉縁状口縁の碗IV類である。87は碗VI類で、見込みに櫛状工具による放射状の施文を有する。外面下半以下は施釉されない。88は皿VI-1 b類で、粗い胎土に淡オーリーブ黄色の釉が施される。貫入が多く、体部下半から外底部は露胎である。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器、斜格子目印き瓦等の細片が出土している。以上から12世紀中頃の井戸に位置付けられる。

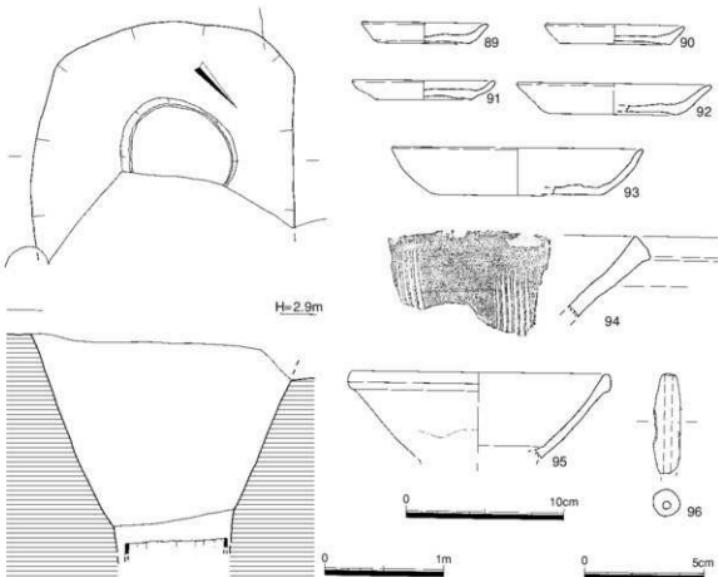
**SE020(第17図)** A-2区の調査区壁際で検出したため、北半部は調査区外に位置する。南側で



第16図 SE018実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

はSE021を切る。現況で径2.2mの円形の掘り方を呈し、壁面は急傾斜ですぼむ。上面からの深さ約1.5mで、井筒下部を据えるための径約1mの円形の掘り込みを有する。その内部には水溜と考えられる径約0.8mの木桶が残るが、腐朽がすすみ、更に掘り下げるとき湧水する。覆土は上層が暗灰褐色砂質土、下層は暗黄褐色砂を主体に暗灰褐色砂が互層に混じる。また、深さ約1.2mで暗灰褐色粘性砂質土を主体とする円形の井筒プランを確認できた。

出土遺物(第17図) 96のみ井筒内、他は掘り方埋土中の出土である。89～91は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、順に復元口径は8.0、8.8、9.0cmを測る。92・93は土師器壺で、復元口径は12.2、15.8cmである。共に外底部は回転糸切りで、93には板状圧痕が認められる。92の内底部はナデ調整を行わない。94は備前焼擂鉢で、内面に櫛描きによる6条単位の擂目が認められる。肥厚する口縁部は面取りされ、下端部が僅かに突出する。95は白磁碗IV類である。内面には1条の沈線を施す。胎土には黒色粒子が多く、外面下半以下は施釉されない。96は管状土錐で、端

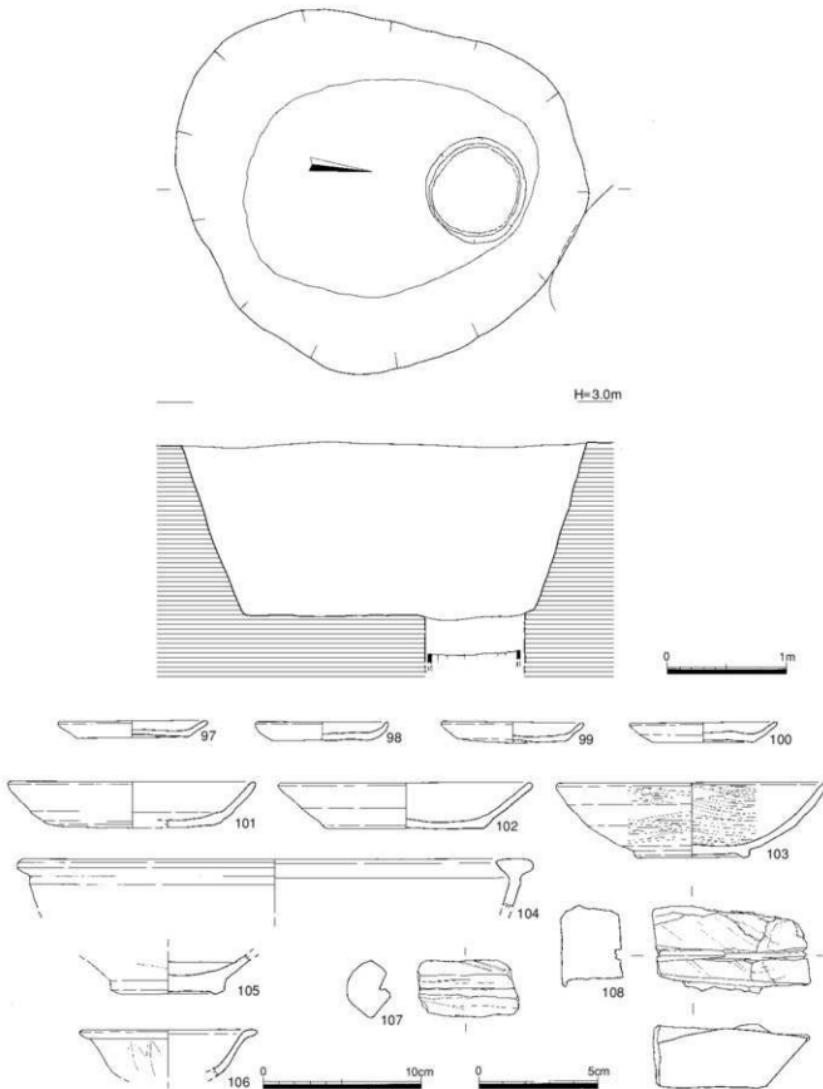


第17図 SE020 実測図(1/40)および出土遺物実測図(96は1/2、他は1/3)

部を欠損する。他に土師質鍋、中国陶器、白磁碗IX類、滑石製石鍋等の細片が出土している。これらの出土遺物から14世紀中頃の井戸と推定される。

SE021(第18図) A・B-2区に位置する井戸で、SE020に切られ、SE025、SK026を切る。平面プランは南北方向にやや長い楕円形を呈し、長径3.4m、短径3.05mを測る。深さ1.4mに平坦面を設け、その北端に井筒下部を据える径約0.9mの円形の掘り込みを有する。その内部には厚みのある板材を組み合わせた木桶が確認できたが、遺存状況は不良であった。なお、桶内部を掘り下げると湧水する。覆土は暗灰褐色砂質土に暗黄褐色砂が混じり、深さ約0.8mから井筒痕跡と考えられる灰褐色粘性砂質土の円形プランが認められた。

出土遺物(第18図) 106のみ井筒、他は掘り方埋土からの出土である。97～102は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。97～100は口径8.4～9.3cmの小皿で、99は完形品である。101・102は坏で、順に口径は15.6、16.0cmを測る。103は口径17.0cm、器高4.7cmの土師器碗である。大きく開く体部の内外面はヨコナデ後、ヘラ研磨して仕上げる。104は「T」字形の口縁部を呈する中国陶器の盤で、口縁部上面から内面にかけてオリーブ黄色の釉が掛けられるが、口縁部は釉を拭き取り、目跡を残す。外面の露胎部分は灰赤色を呈する。105は白磁碗IV-1a類で、見込みに沈線を有する。外面下半から底部にかけては施釉されない。106は龍泉窯系青磁の坏III-4類である。口縁部を外反させ、体部外面には鍋蓮弁文を施すが、釉が厚いため、やや不鮮明である。貫入が多く認められる。107・108は滑石製品である。断面形態は異なるが、片面のみに鋸引きによ



第18図 SE021実測図(1/40)および出土遺物実測図(107・108は1/2、他は1/3)

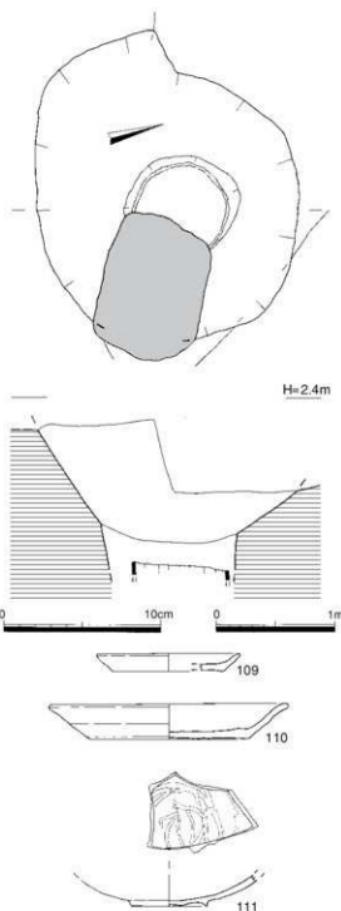
る溝を設ける。有溝石錘の未成品であろうか。順に重量は26.9、100.6gを測る。他に須恵質土器、龍泉窯系青磁碗II類、銹化の著しい鉄製品、獸骨等が出土している。以上の出土遺物から13世紀中頃から14世紀初頭の井戸に位置付けられよう。

**SE023(第19図)** B-2区で確認した井戸で、SE024・025を切る。北側の搅乱や東側に残る既存建物のコンクリート杭により遺構の壁面や底面が削平、破壊される。また当初、西側に重複するSE024との切り合い関係が不明であったため、両者を同時に掘削し、約0.6m下がった段階で、プランや前後関係を把握することができた。よって、図示した遺構図の上端プランはかなり小規模なものになっているが、現況で径2.7m以上を測る円形の掘り方である。底面近くには、コンクリート杭により南東側を破壊されるものの、径約1mの円形の掘り込みが認められ、径約0.7mの木桶が据えられていた。木質は腐朽しており、内部を掘り下げるところが湧水する。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、井筒痕跡部分は粘性のある暗灰褐色砂質土であった。

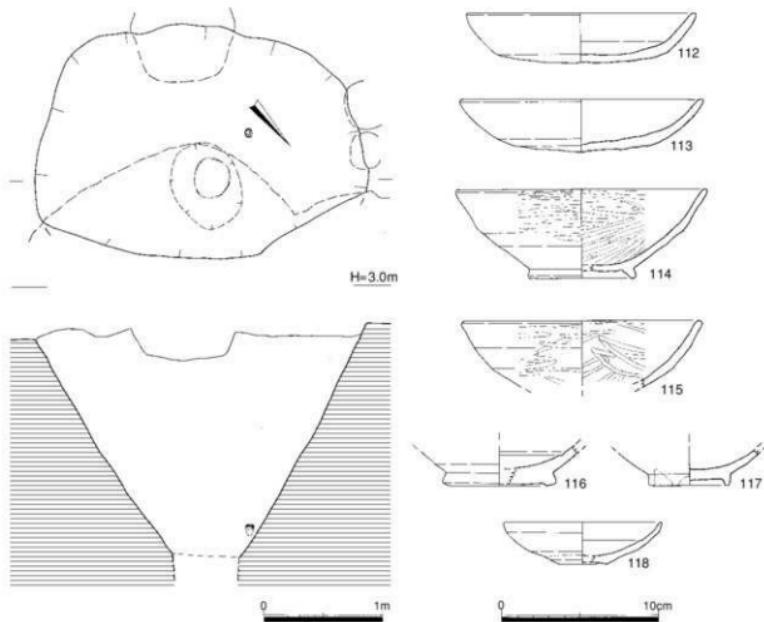
**出土遺物(第19図)** 全て掘り方埋土中の遺物である。109・110は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。109は復元口径9.1cmを測る小皿、110は口径15.2cmの壺である。111は畿内産瓦器椀で、断面三角形の低い高台を貼付する。器壁は薄く、見込みに暗文風の粗いミガキを施す。他に中国陶器、白磁碗IV類、龍泉窯系青磁碗I・II類等が出土している。これらの出土遺物や重複する遺構の関係から13世紀中頃以降の井戸と推定される。

**SE024(第20図)** B-2区に位置する。北半部をSE023と搅乱に切られるため、平面プランが不整になっているが、径2.8m以上の円形もしくは楕円形の掘り方を呈するものと推測され、壁面は急な傾斜ですぼむ。底面近くで径0.3m程度の木質が認められ、内部より拳大の礫が出土したが、湧水する。木質は腐朽がすすみ、輪郭のみの検出であったが、その法量から水溜として据えられた曲物と推測される。また、その上位の壁面には木杭1本が打ち込まれていた。覆土は暗灰茶褐色砂質土を主体とし、底面近くで確認できた井筒痕跡は暗灰褐色粘性砂質土であった。

**出土遺物(第20図)** 全て掘り方埋土からの出土である。112・113は土師器壺で、順に復元口径は14.4、15.4cmを測る。板状圧痕を有する外底部は、112が回転糸切り、113は回転ヘラ切りである。114は復元口径15.8cmを測る土師器椀で、内外面をヘラ研磨により平滑に仕上げる。断面台形状の



第19図 SE023 実測図(1/40)および  
出土遺物実測図(1/3)  
109  
110  
111

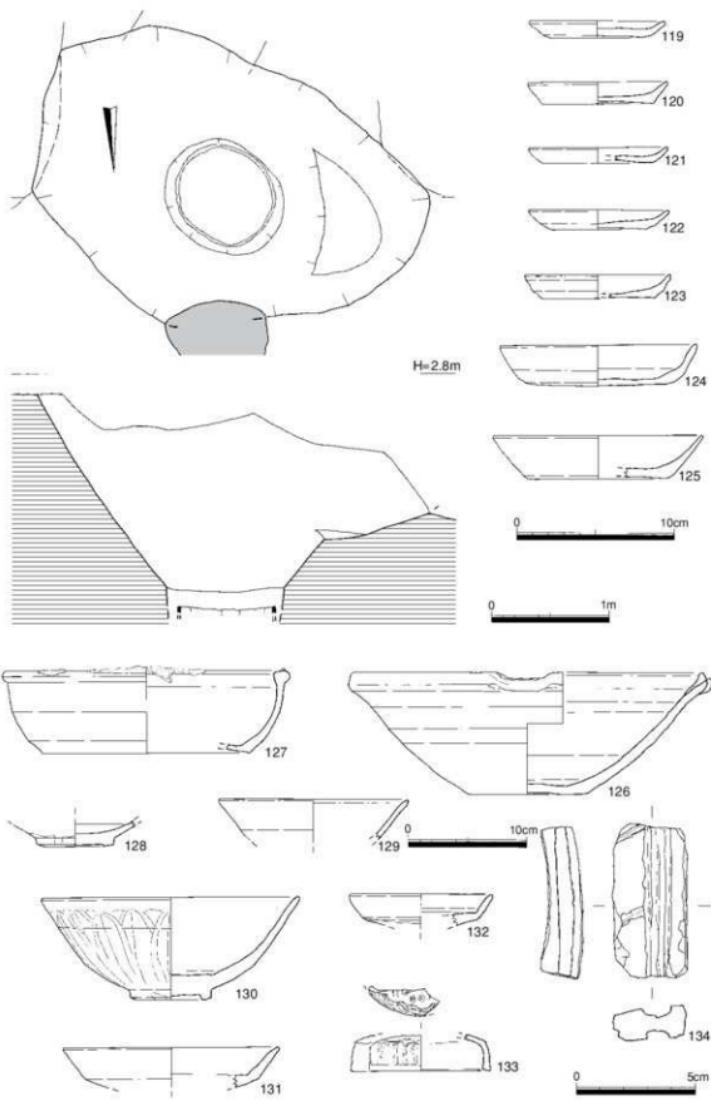


第20図 SE024 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

低い高台を貼付する。115は瓦器椀である。ヨコナデ後、疎にミガキを加えている。内面から口縁部外面は黒灰色、体部外面は灰白色を呈する。116～118は白磁で、116・117は碗である。116はIV-1 a類で、見込みに段差のある沈線を配する。内面にビンホールが多く認められる。117は細く直立する高台の際まで釉が垂れ、二次的加熱を受ける。外底部の露胎部分は赤褐色を呈する。118は皿VI-1 a類で、内面に沈線状の段を有する。淡オリーブ黄色の釉は、外面下半以下には施されない。他に中国陶器、滑石製品等の細片が出土しているが、青磁を含まない。12世紀前半から中頃の井戸と考えられる。

SE025(第21図) A・B-2区で確認した井戸で、SE021・023に東西両側を一部切られ、北側の壁面には既存建物のコンクリート杭が残る。現況での平面プランは梢円形を呈し、長径3.4m、短径2.3mを測る。壁面東側の中位にはテラスを設け、底面中央部には径約1mの円形の掘り込みを有する。その内部は湧水するものの、腐朽した径0.8mの木桶が残る。覆土は暗茶褐色砂質土を主体とし、井筒痕跡部分は暗灰褐色粘性砂質土であった。

出土遺物(第21図) 124・126・127は井筒、他は掘り方埋土中からの出土である。119～125は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器である。この内、119～123は小皿で、復元口径は8.6～9.2cmを測る。124・125は壺で、順に口径は12.4、13.2cmを測る。126は復元口径29.3cm、器高10.3cmを測る土師質の片口鉢である。口縁部を肥厚させ、端部をつまみ上げる。器面の大半は風化



第21図 SE025 実測図(1/40)および出土遺物実測図(134は1/2、126は1/4、他は1/3)

による剥落がすすむが、外底部に回転糸切りの痕跡が僅かに残る。127は中国陶器の小盤である。断面方形状の口縁部には目跡が顕著に残る。灰色の粗い胎土にオリーブ黄色の施釉がなされるが、外面は露胎で、暗赤褐色を呈する。復元口径17.6 cm 器高5.2 cmを測る。128・129は白磁皿である。128はII-1類で、高台の削りが浅い。高台まで一部の釉が垂れるが、体部下半以下は露胎である。129は口禿げのIX-1c類である。130～132は龍泉窯系青磁である。130は碗IIb類で、先端がやや丸味のある鍋蓮弁文を有する。釉の一部が豊付きまで垂れる。露胎の外底部は淡赤褐色を呈する。131は皿I-1a類、132は皿I-3b類である。132の外面屈曲部以下は露胎である。133は青白磁の合子蓋で、体部に菊弁、天井部に花文を型押しにより施文する。体部内面から口縁部は露胎である。134は滑石製石鍋を再利用した石鍤で、片面に煤が付着する。両面中央部の長軸方向に幅広の溝を切り出す。重量は51.8 gである。他に龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁、鋳化した鉄製品等が出土している。以上から13世紀中頃の遺構に位置付けられよう。

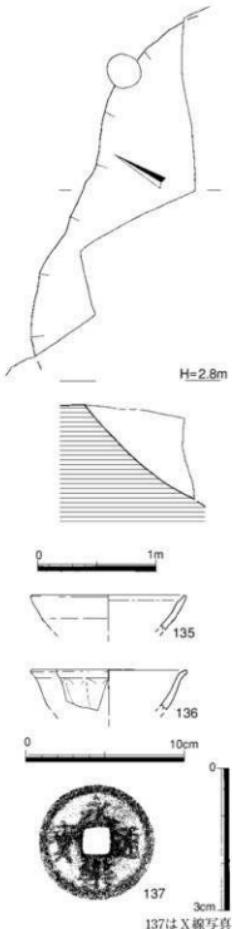
SE027(第22図) B-2区の調査区コーナー部に位置し、遺構北側の一部を検出したにとどまる。平面プランや断面形状から井戸と判断したが、調査区内では井筒の確認には至らなかつた。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第22図) 135は口禿げの白磁皿IX-1類である。136は外面に鍋蓮弁文を有する龍泉窯系青磁の小皿である。厚めに釉が施される。137は明代の銅錢「永樂通寶」(初鑄年:1408年)である。他に細片の回転糸切り底の土師器、土師質鍋、瓦質土器等の細片が出土した。これらの出土遺物から15世紀の井戸と推定される。

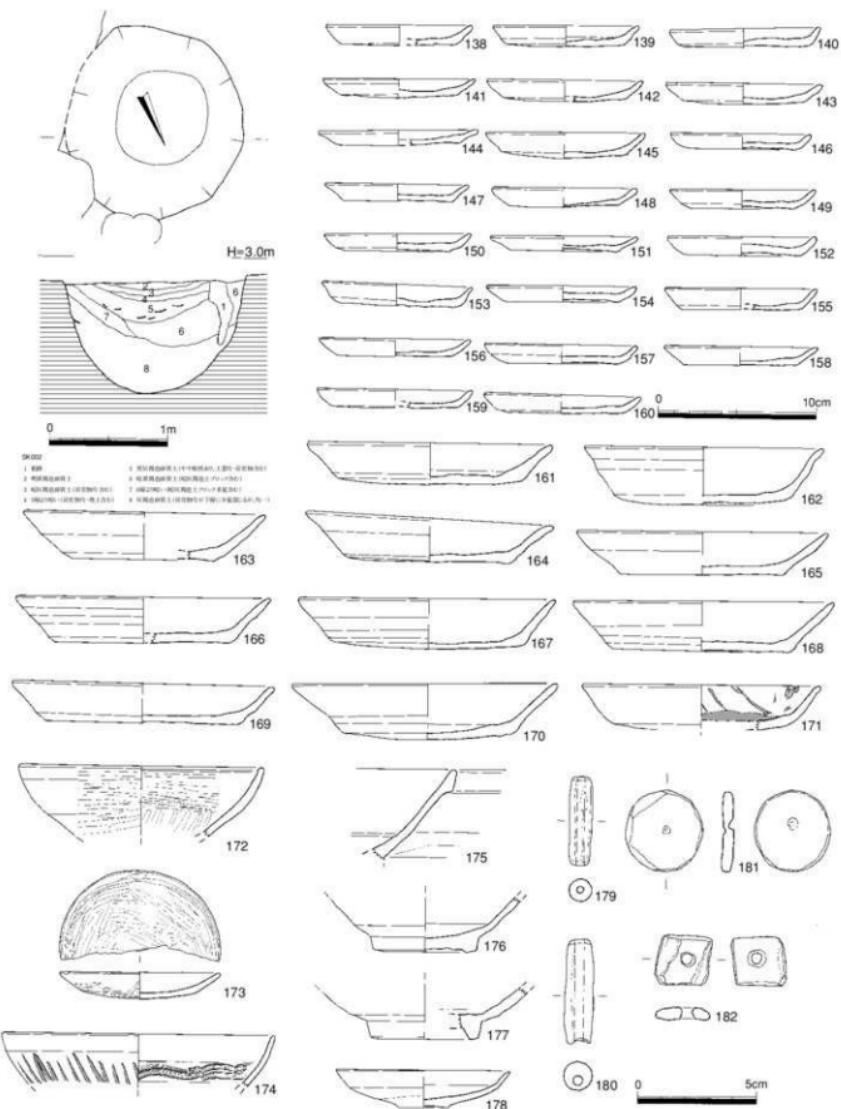
## 2) 土坑(SK)

SK002(第23図) C-5区で確認した径1.5～1.65 mを測る円形プランの土坑である。断面は船底形を呈し、深さ1.0 mを測る。レンズ状に堆積する覆土上層の3～5層には炭化物が多量に含まれ、5層を主体に土師器が多数廃棄されていた。上層との層界が明瞭である6層以下の下層には炭化物をほとんど含まない。土師器の残存状況は良好で、小皿は完形品が多い。陶器類は少量で、特に青磁は少ない。なお、豪雨により東側壁面が固化前に崩壊したため、上端線の一部は復元による。

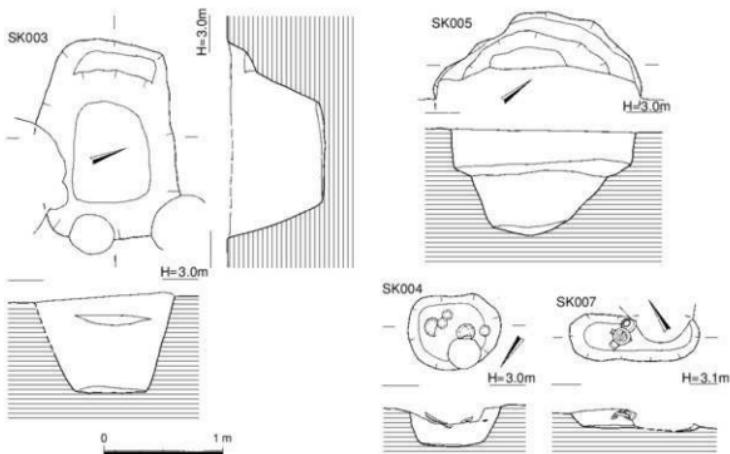
出土遺物(第23図) 138～160は板状圧痕を有する土師器小皿である。138～145は回転ヘラ切り底、他は回転糸切り底である。口径は8.8～10.1 cmで、平均は9.5 cmを測る。139・141、145～147、149は下層、他は上層出土である。161～171は土師器壺である。外底部は171が不明で



第22図 SE027 実測図(1/40)  
および出土遺物実測図  
(137は1/1、他は1/3)



第23図 SK002 実測図(1/40)および出土遺物実測図(179～182は1/2、他は1/3)



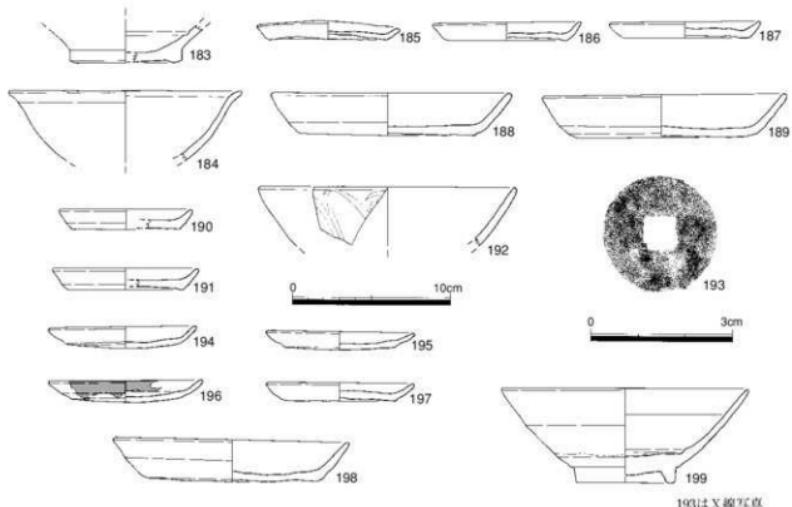
第24図 SK003・004・005・007 実測図(1/40)

あるが、161が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、いずれも板状圧痕が認められる。口径は15.0～16.7cmを測り、平均は15.8cmである。171の内底部には黒墨が広く付着し、体部に放射線状の墨描きが認められる。164・170・171は下層、他は上層からの出土である。172・173は上層出土の瓦器である。172は椀で、口縁部内面に鈍い段を有する。内外面にやや疎なミガキを施し、淡灰色を呈する。173は皿である。丁寧なミガキにより平滑な器面を呈する。外底部には回転糸切り痕が残る。174は上層出土の初期龍泉・同安窯系青磁〇類碗である。内外面に櫛状工具による施文を有するが、外面は片彫り風の縱線、内面は細かい波状である。釉調は暗緑色を呈する。175～178は白磁で、177のみ下層出土である。175・176は碗IV-1a類、177は碗V類で、二次的加熱を受ける。178は皿VI-1a類で、黄味をおびた釉が施されるが、体部外面下半から外底部は露胎である。179・180は上層出土の管状土錘で、順に重量は3.4、6.7gを測る。181は回転糸切り底の土師器を円盤状に打いた土製品で、上層からの出土である。両面から穿孔を施すが、貫通していない。径3.5cmを測る。182は各面を研磨し、方形に仕上げた上層出土の滑石製品である。一边約2cm、厚さ0.5cmを測り、中央部に径0.5cmの穿孔を有する。以上の出土遺物から12世紀前半から中頃の土坑と考えられる。

**SK003(第24図)** C-4区に位置し、周辺を他の遺構に切られるが、隅丸長方形の平面プランをなすものと考えられる。西側の壁面にテラスを有し、現況で長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.8mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物(第25図183・184)** 共に白磁碗である。183はIV-1a類の底部で、見込みに段状の沈線が巡る。184はV-2a類で、ややオリーブがかかった釉が内外面に施される。他に回転糸切りおよびヘラ切りの土師器等の細片が少量出土している。12世紀前半から中頃の遺構と推定される。

**SK004(第24図)** C-4区で検出した小形の土坑である。径0.65～0.8mを測る楕円形状の平面プランを呈し、深さ0.3mの逆台形の断面形をなす。上層で完形の土師器小皿3点、壺2点が出土した。出土状況から一括廃棄された土器群と考えられる。



第25図 SK003・004・005・007出土遺物実測図 (193は1／1、他は1／3)

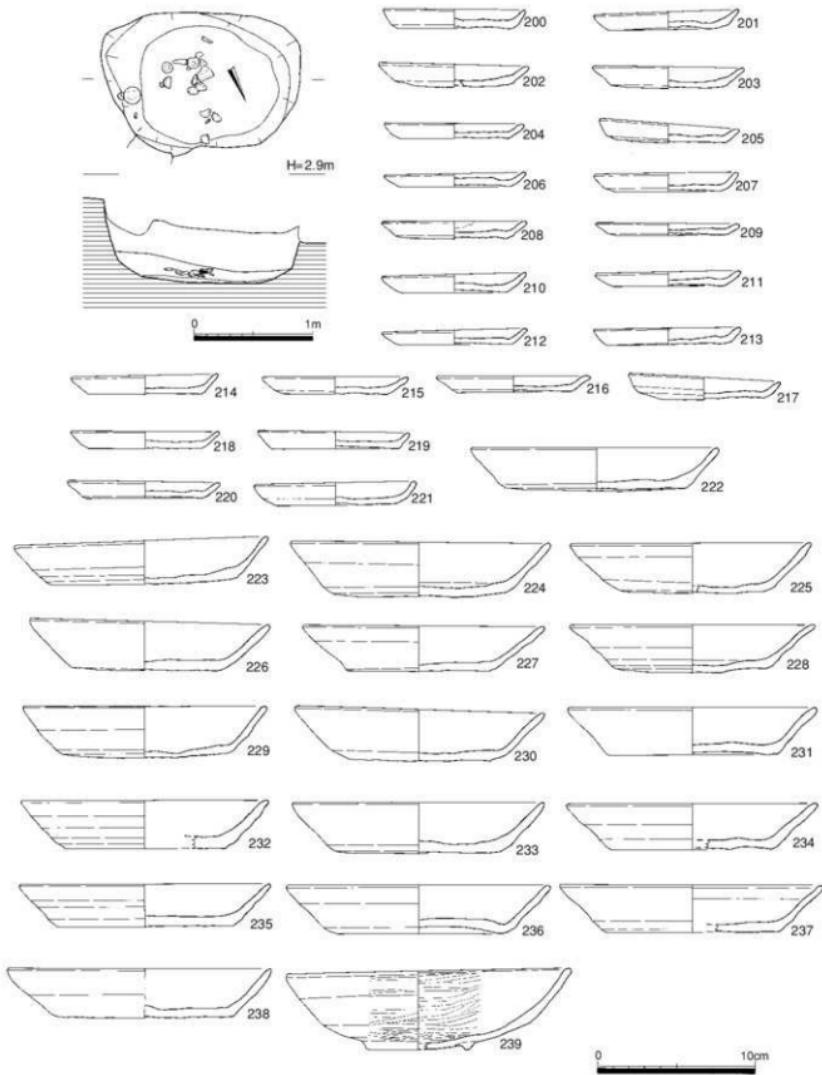
出土遺物(第25図185～189) いずれも板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器で、色調は赤橙色を呈する。185～187は小皿で、順に口径は9.0、9.3、9.5cm、188・189は壺で、同じく15.1、15.4cmを測る。他に中国陶器、同安窯系青磁等が少量出土しているが、細片である。これらの遺物から12世紀後半に位置付けられる。

SK005(第24図) B・C・5区の調査区壁際で確認した。遺構の大半は調査区外に位置するが、現況で径1.8m以上の円形プランを呈するものと推定される。壁面の傾斜は急で、中位に狭いテラスを有する。深さ0.9mで、覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、下層では暗黄褐色砂が混じる。

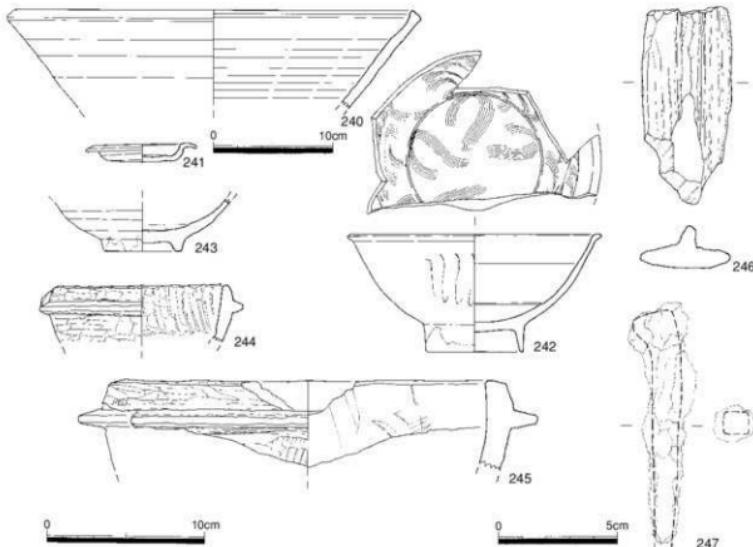
出土遺物(第25図190～193) 190・191は回転糸切り底の土師器小皿で、外底部には板状圧痕が認められる。順に復元口径は、8.4、9.2cmを測る。192は龍泉窯系青磁碗II-a類である。193は銹化した銅錢で、北宋代の「嘉祐通寶」(初鑄年:1056年)であろうか。他に須恵質土器、中国陶器、瓦器等の細片が出土している。13世紀前半頃の遺構と推定される。

SK007(第24図) B・4区に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.1m、幅0.35m、深さ0.15mを測る。北東側をSP193に切られるが、中央部の覆土中より土師器および白磁碗が出土した。

出土遺物(第25図194～199) 194～197は土師器小皿で、外底部は197が回転糸切り、他は回転ヘラ切りである。いずれも板状圧痕が認められ、口径は9.3～9.6cmを測る。196は内外面に煤が付着する。198は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器壺で、内底部は強くナデる。口径14.8cmを測る完形品である。199は見込みの袖を輪状にカキ取る白磁碗VII-2類で、体部外面の下半から高台には施釉されない。他に白磁碗V類、皿VI類、鉄製品等が出土している。12世紀中頃の土坑と考えられる。



第26図 SK009 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)

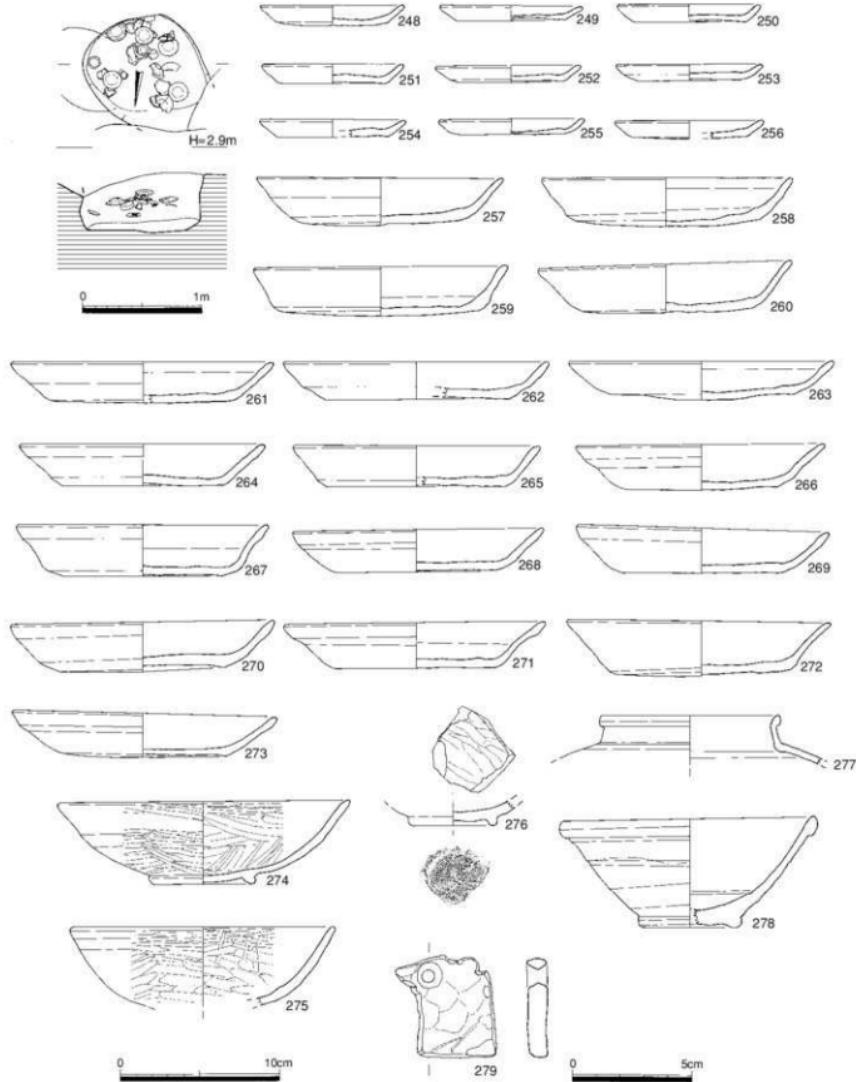


第27図 SK009出土物実測図(2)(244・246・247は1/2、240は1/4、他は1/3)

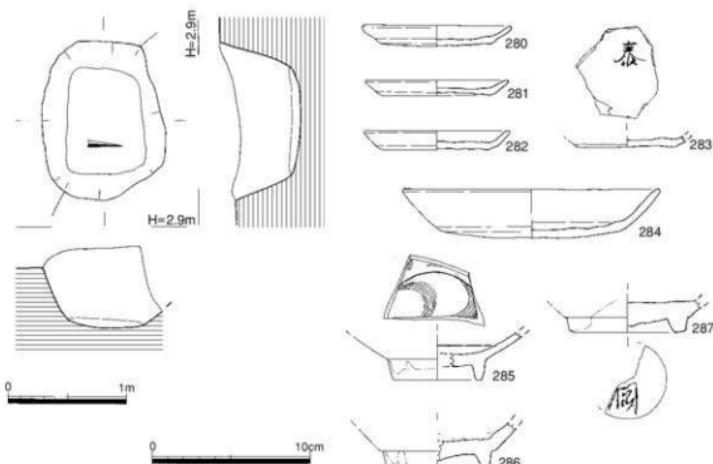
SK009(第26図) B-4区で検出した不整な隅丸方形の土坑である。長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.7mを測り、壁面は直立気味に立ち上がる。覆土の上層はややしまりのある淡灰褐色砂質土、下層は黒灰褐色砂質土で、多数の土師器小皿および壺が含まれる。土師器の遺存状況は良好であるが、完形品は数点であった。

出土遺物(第26・27図) 200～221は板状圧痕を有する土師器小皿で、200～203は回転ヘラ切り底、他は回転糸切り底である。口径は8.8～10.2cmを測り、平均は9.3cmである。222～238は土師器壺で、いずれも板状圧痕が認められる。外底部は、222～224が回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。口径は15.1～16.7cmで、平均は15.8cmである。239は瓦器壺で、ヨコナデ後、ミガキを加える。外底部には回転糸切り痕が残る。240は須恵質土器の鉢で、口縁部内面はヨコナデにより丸くつまみ出す。体部はヨコナデ後、ナデを加える。241は中国陶器の落とし蓋である。灰色の胎土の上面のみに淡褐色の釉が薄く掛かる。242・243は白磁碗である。242はV-4c類で、体部外面にはヘラ描きによる花弁文、内面には櫛状工具による施文を施す。高台まで釉が垂れる。243は器面に沿って、見込みの釉を輪状にカキ取る。VII-1類である。244～246は滑石製品である。244・245は石鍋で、244は口径7.0cmの小形品である。246は欠損するが、板状の基部の上面中央部に突起を削り出し、下面は摩滅により凸面を呈する。247は銹化の著しい鉄釘で、他に数点出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑に位置付けられよう。

SK010(第28図) A・B-4区で検出した小形の土坑である。SE001や周辺の遺構に切られるが、現況で1辺1m前後の隅丸方形を呈する。壁面は直立気味に立ち上がり、深さ0.5mを測る。覆土



第28図 SK010 実測図(1/40)および出土遺物実測図(279は1/2、他は1/3)



第29図 SK019 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

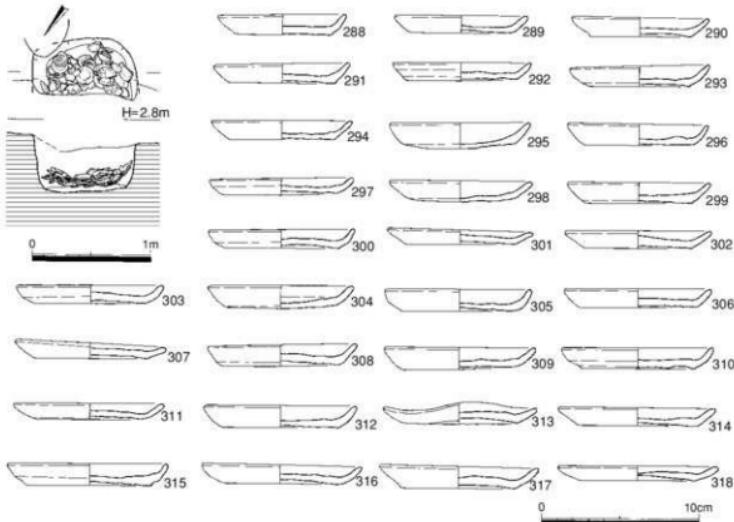
はやや粘性のある暗褐色砂質土で、中位から上層にかけて土師器を主体とする遺物が廃棄される。

出土遺物(第28図) 248～256は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。口径は9.0～9.4cmを測り、平均は9.1cmである。257～273は土師器坏である。いずれも外底部に板状圧痕があり、257～263は回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。口径は15.4～16.8cm、平均は16.1cmを測る。274～276は瓦器楕である。体部の外外面にミガキを施す。276の外底部にはヘラ記号が認められる。277は中国陶器の壺で、短く直立する頸部に玉縁状の口縁部が付く。砂粒の目立つ灰色の胎土の内面は露胎、外面には化粧土を施す。278は白磁碗IV-1a類で、回転ヘラ削り痕を残す体部の中位以下は露胎である。279は滑石製品で、各面は研磨により平滑である。径1.0cmの穿孔を両面より行う。他に白磁碗V類の細片が出土している。12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK019(第29図) 調査区西側のB-1・2区で確認した。北側を搅乱に切られるが、隅丸長方形の端正な平面プランをなす。長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.65mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は黒灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第29図) 280～283は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。280のみ回転ヘラ切り、他は回転糸切り底である。前3点の口径は順に、9.4、9.0、9.2cmを測る。283の内底部には「泰」が墨書きされる。284は板状圧痕のある回転ヘラ切り底の土師器坏で、口径は16.2cmを測る。285～287は白磁碗である。285はV類で、内面に櫛状工具による施文と沈線を有する。286・287は見込みの釉を輪状に剥ぐI類で、287の外底部には「綱」(カ)の墨書きが認められる。他に瓦器、須恵質土器、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土した。12世紀中頃の土坑であろう。

SK026(第30図) B-2区で検出した土坑である。北側をSE021によって切られるため、全容は不明である。現況で幅0.9mを測り、隅丸方形を呈するものと推定される。壁面の立ち上がりは急で、深さ0.5mを測る。覆土は暗褐色砂質土を主体とし、下層には完形に近い土師器小皿および坏が多数廃棄されていた。なお、龍泉窯系青磁および白磁が出土しているが、数点の細片のみである。

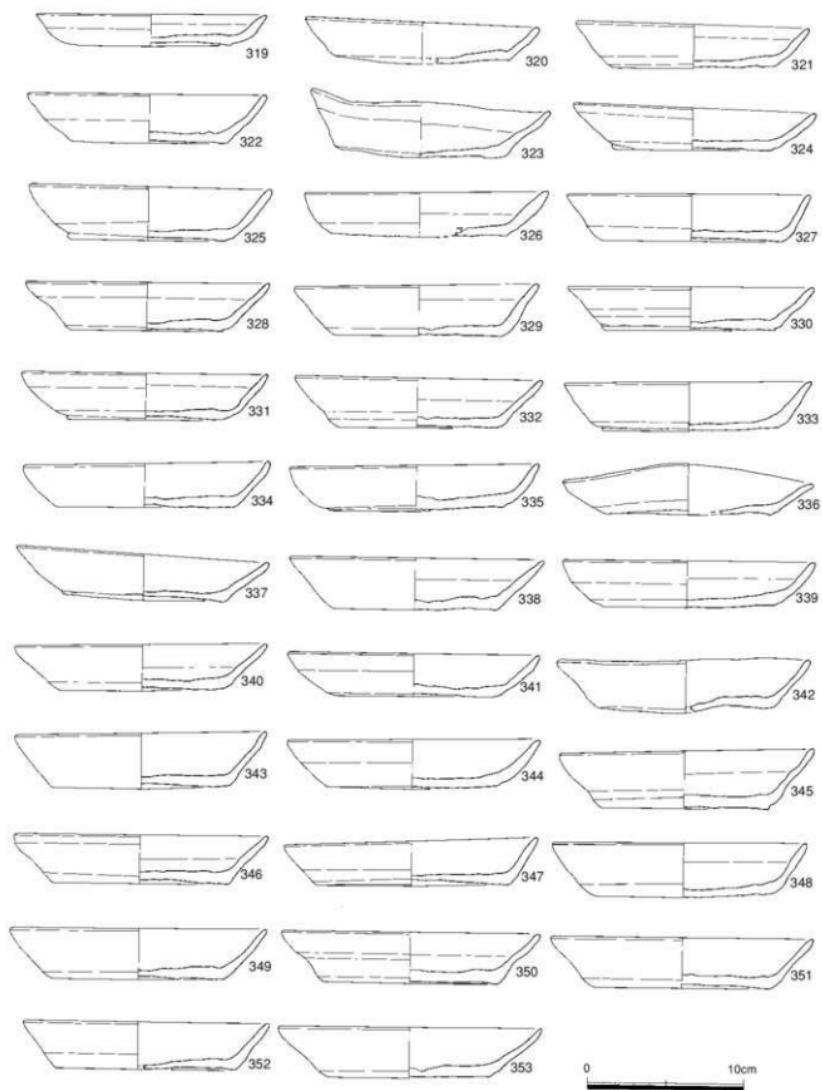


第30図 SK026実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)

出土遺物(第30・31図) 288～318は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。器面はヨコナデ調整を行うが、内底部にはナデを加える。口径は8.1～10.1cmを測り、平均は9.2cmである。319～353は土師器壺である。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。小皿同様の調整が施され、口径は14.6～16.7cm、平均は15.8cmを測る。他に瓦器や鉄製品等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の所産と考えられる。

SK266(第32図) B-3区に位置する小形の円形土坑で、径0.9m、深さ0.45mを測る。覆土は黒灰褐色砂質土を主体とし、炭化物片を含む。土師器小皿を主体とする遺物が廃棄されていた。

出土遺物(第32図) 354～377は板状圧痕を有する土師器小皿で、完形に近い個体が多い。このうち、354～371は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りである。口径は8.8～10.1cmを測り、平均は9.3cmである。378・379は回転ヘラ切り底の土師器丸底杯で、内面はコテ当てにより平滑に仕上げる。378は復元口径14.2cmで、板状圧痕はない。379は押し出しによる指オサエが外面に残り、板状圧痕を有する。口径は15.9cmを測る。380～382は瓦器である。380・381は低い高台を貼付する椀で、体部内外面にミガキを施す。380は外底部に3本の平行線がヘラで刻まれる。381は外面に指オサエが残る。382は口径10.1cm、器高2.0cmを測る皿である。体部の内外面はミガキにより仕上げ、外底部には板状圧痕を有する回転ヘラ切り痕が残る。383～388は白磁で、この内、383～386は碗である。383はIV-1a類で、体部外面の下半以下は露胎である。384は小振りな玉縁状口縁を呈するII-1類で、383同様に下半には施釉されないが、化粧土が認められる。385も同様の口縁部をなすII類であるが、更に玉縁が小さい。386は384に類似した高台を呈し、内面を斜に削る。外面下半から高台は露胎である。387・388は皿である。387はIV-2a類で、外底部の釉は削り取る。



第31図 SK026出土遺物実測図(2)(1/3)

見込みに明瞭な段を有する。388はVI-1 b類で、体部下半以下には施釉しない。内面には貫入が認められる。389・390は滑石製の石錘である。389は抉入りで、一部に煤の付着が認められる。石錘の転用であろう。下半を欠損し、長さ4.4cmを測る。390は方形形状を呈するもので、中央部に径1.0cmの穿孔があり、紐それが認められる。長さ3.6cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm、重量25.2gを測る。他に中国陶器、龍泉窯系青磁等の細片が出土しているが、少量である。以上の出土遺物から12世紀前半から中頃の土坑に位置付けられよう。

### 3) ピット(SP)出土の遺物

調査区の全城に重複して分布するピットは、径0.3m程度のものを主体とするが、径0.8m前後の比較的大きなものも認められた。今回の調査では、建物としてのまとまりを把握することはできなかつたが、ここではピット出土の主要な遺物について遺構毎に報告を行う。なお、遺構番号の後ろの( )は検出位置である。

SP195(B-4区)(第33図391～399) 全て土師器である。391～396は小皿で、口径8.3～9.7cmを測り、391・392は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りである。397～399は順に口径15.3、16.1、14.6cmの坏で、外底部は399が回転糸切り、他は回転ヘラ切りである。小皿、坏共に板状圧痕を有する。

SP243(A-4区)(第33図400・401) 共に板状圧痕を有する回転糸切り底土師器小皿で、口径は順に9.3、9.5cmを測る。

SP390(B-2区)(第33図402・403) 共に口径9.6cmを測る土師器小皿で、外底部に板状圧痕があるが、402は回転ヘラ切り底、403は回転糸切り底である。

SP391(B-2区)(第33図404) 口径9.3cmを測る土師器小皿で、外底部は板状圧痕を有する回転ヘラ切りである。

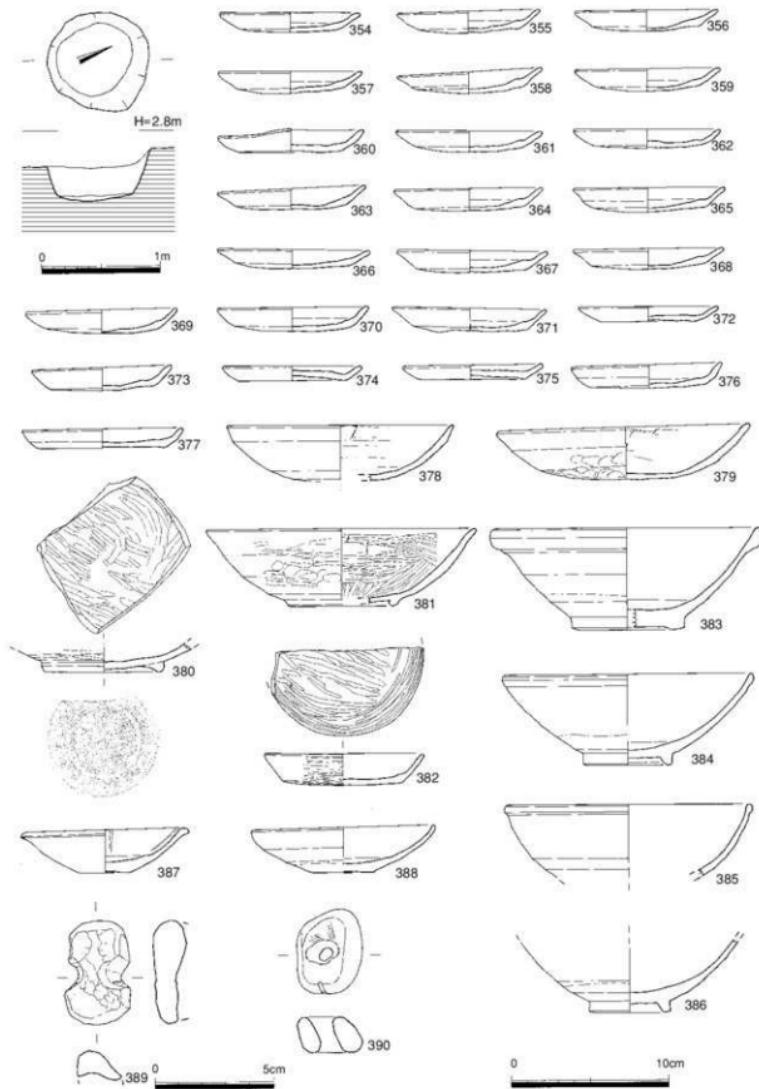
SP394(B-2区)(第33図405) 板状圧痕がある回転ヘラ切り底の土師器小皿である。口径は9.1cmを測る。

SP193(B-4区)(第33図406) SK007を切るピットで、406は口径16.2cmを測る土師器坏である。外底部は回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。

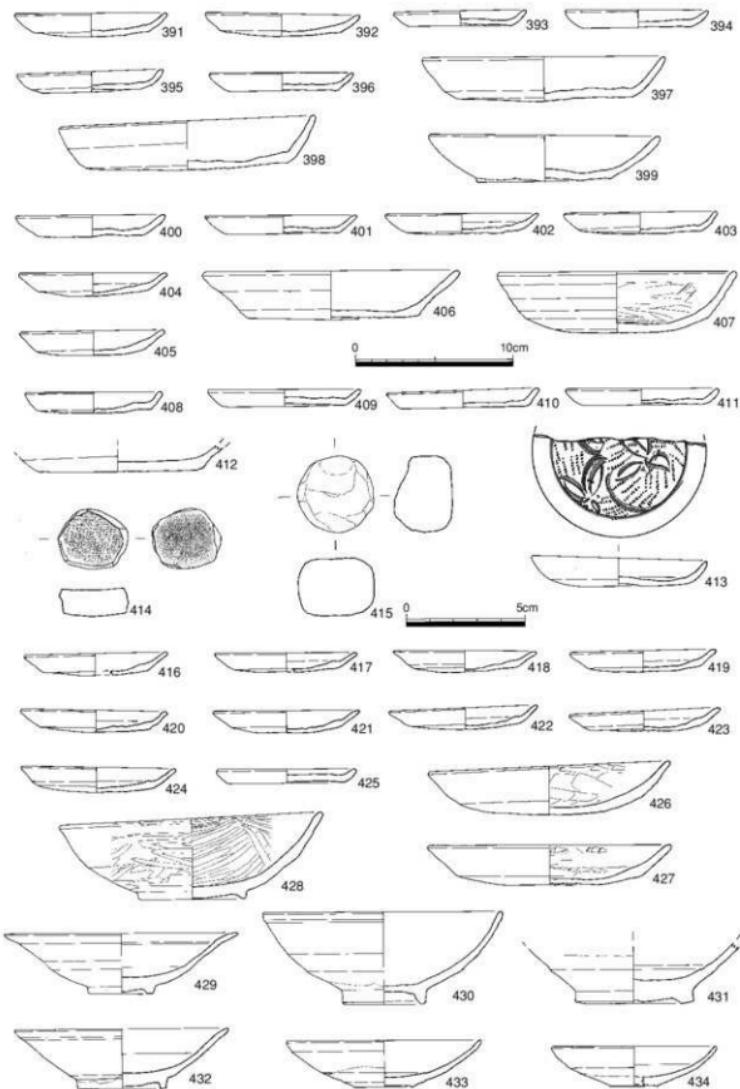
SP313(A-2区)(第33図407) 回転ヘラ切り底の土師器丸底坏である。体部外面にはヨコナデによる凹凸が著しい。内面にはコテ当て痕が残り、平滑に仕上げる。口径は15.0cmを測る。

SP247(B-4区)(第33図408～415) 408～411は土師器小皿である。復元口径は408が8.6cm、他は9.6cmである。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。412は板状圧痕がある回転糸切りの底の土師器坏である。413は白磁皿で、口縁部は鈍く屈曲して立ち上がる。見込みにはやや太目の沈線が巡り、片彫りによる花文と櫛状工具による施文が施される。灰白色の釉が全面に施釉されるが、外底部は削り取られる。414・415は瓦玉で、414は平瓦を打欠き整形したものである。片面に布目、一方にはヨコナデを残す。415は土師質土器を加工したもので、径3.2cm、厚さ2.4cmを測る。

SP257(A-3区)(第33図416～434) 416～425は土師器小皿である。外底部にはいずれも板状圧痕が認められ、425のみ回転糸切り、他は回転ヘラ切りである。口径は8.8～9.7cmを測り、平均は9.2cmである。426・427は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器丸底坏で、内面にコテ当てによるミガキを施す。順に口径は15.3、15.4cmを測る。428は瓦器椀である。体部外面には鈍い稜を有し、内外面には比較的丁寧なミガキがなされる。429は初期高麗青磁の皿で、口縁部を外反させて大きく開く。内面の上半には沈線、下半には段を有する。灰色の胎土の全面に暗灰緑色の



第32図 SK266 実測図(1/40)および出土遺物実測図(389・390は1/2、他は1/3)



第33図 ピット出土遺物実測図(1)(414・415は1/2、他は1/3)

釉が掛けられるが、疊付きのみ削り取る。買入が多く認められる。430～434は白磁である。430は碗II-1類で、体部下半以下は露胎である。化粧土が施され、釉は黄白色を呈する。431は碗IV-1 a類で、露胎となる体部外面にはヘラ削りがなされる。胎土は粗く、黒色粒子が多く含まれる。432は浅形の碗VI-1 a類で、細く直立する高台際まで、釉がおよぶ。体部内面の中位には浅い沈線が巡る。433・434はVI-1 b類の皿で、外面下半には施釉されない。433は見込み近くに、434は内面中位に段を有する。

SP268 (B-3区) (第34図435～437) 435は板状圧痕がある回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径8.6cmを測る。436は玉縁状の口縁部を呈する土師器楕片である。内外面を丁寧に研磨し、黄白色を呈する。437は復元口径13.6cmの土師器坏で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。

SP345 (B-1区) (第34図438～443) 438は回転ヘラ切り底の土師器丸底坏で、復元口径14.8cmを測る。439は土師器楕で、高い高台は外側にやや開く。440～443は白磁碗IV-1 a類である。釉調は灰白色で、441はやや青味がある。

SP350 (A-2区) (第34図444～447) 444～446は白磁で、444は碗IV類である。445は皿XI類で、口縁部を外側に折り曲げる。体部中位で屈曲して稜をなす。内面には段を有し、櫛状工具による施文が施される。446は見込みに櫛目文を有する碗で、高台際まで釉が掛かる。447は龍泉窯系青磁碗で、見込みに花文の印文がある。釉の一部は疊付きまでおよぶ。

SP114 (C-4区) (第34図448) 白磁皿VI-1 b類で、体部内面の中位に段状の沈線を配する。やや黄味をおびた釉は体部下半には施釉されない。内面には買入が多く認められる。

SP388 (B-2・3区) (第34図449～452) 449・450は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿で、順に口径は9.2、9.9cmを測る。451は土師器楕である。内外面を研磨し、口縁部にはヨコナデを加える。外底部には「×」のヘラ記号が認められる。452は深みのある白磁碗で、口縁端部を僅かに摘み出す。乳白色の釉が内外面に施される。

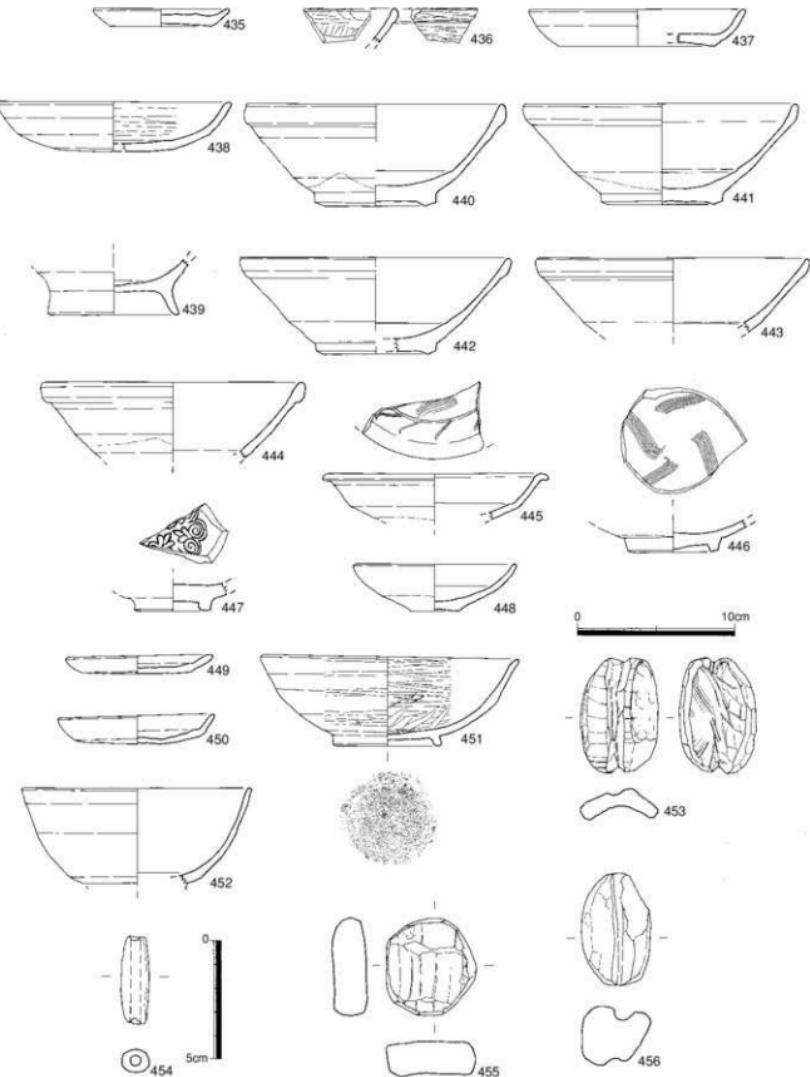
SP316 (B-2区) (第34図453) 楕円形を呈する滑石製の有溝石錘で、凸面側に幅0.8cmの溝を粗く削る。長さ7.3cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm、重量79.3gを測る。石錘の転用品であろう。

SP203 (B-4区) (第34図454) 土師質の管状土錘で、僅かに中央部が太い紡錘形を呈する。色調は黒灰色で、長さ3.7cm、重量3.6gを測る。

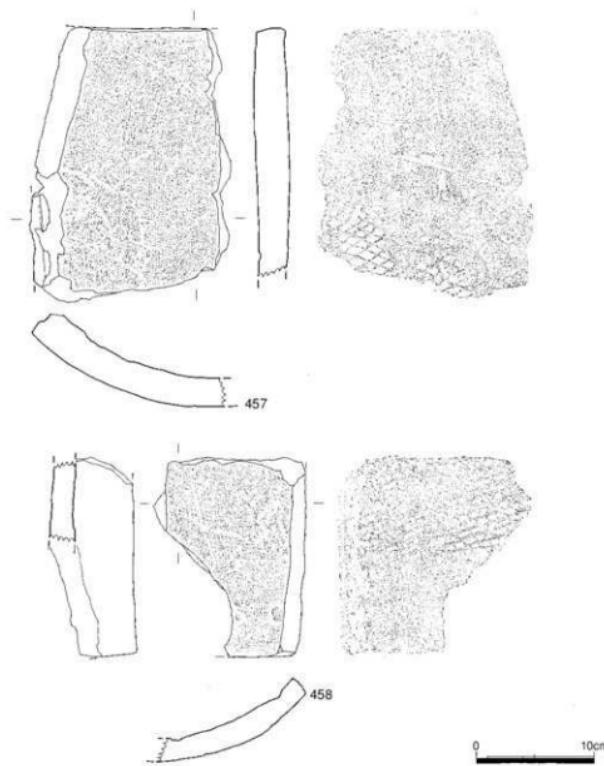
SP385 (B-2区) (第34図455) 滑石製石錘を再加工した円盤状の石製品で、周縁を粗く研磨する。径5.6～6.2cm、厚さ2.3cm、重量138.3gを測る。

SP304 (A-2区) (第34図456) 楕円形をなす土師質の有溝土錘で、胎土には砂粒を多量含む。長さ7.1cm、幅4.4cm、厚さ3.8cmを測る。欠損品で、現重量は100.1gである。

SP384 (B-2区) (第35図) 共に須恵質の平瓦で、胎土に砂粒が目立つ。457はヘラ削りした端面が遺存する。凸面はナデ調整を行うが、細い斜格子目の叩きが部分的に残る。凹面には粗い布目が認められ、端面近くをナデ消している。厚さ2.6cmを測る。458は端面と側面が残る。側面には分割裁面と破面が認められ、調整を加えていない。凸面は斜格子目の叩きであるが、格子間が幅広に潰れる。叩打具の端部が直線的にみえる。布目が残る凹面は、端部側に粗いナデを行う。厚さ2.0cmである。



第34図 ピット出土遺物実測図(2)(454は1/2、他は1/3)

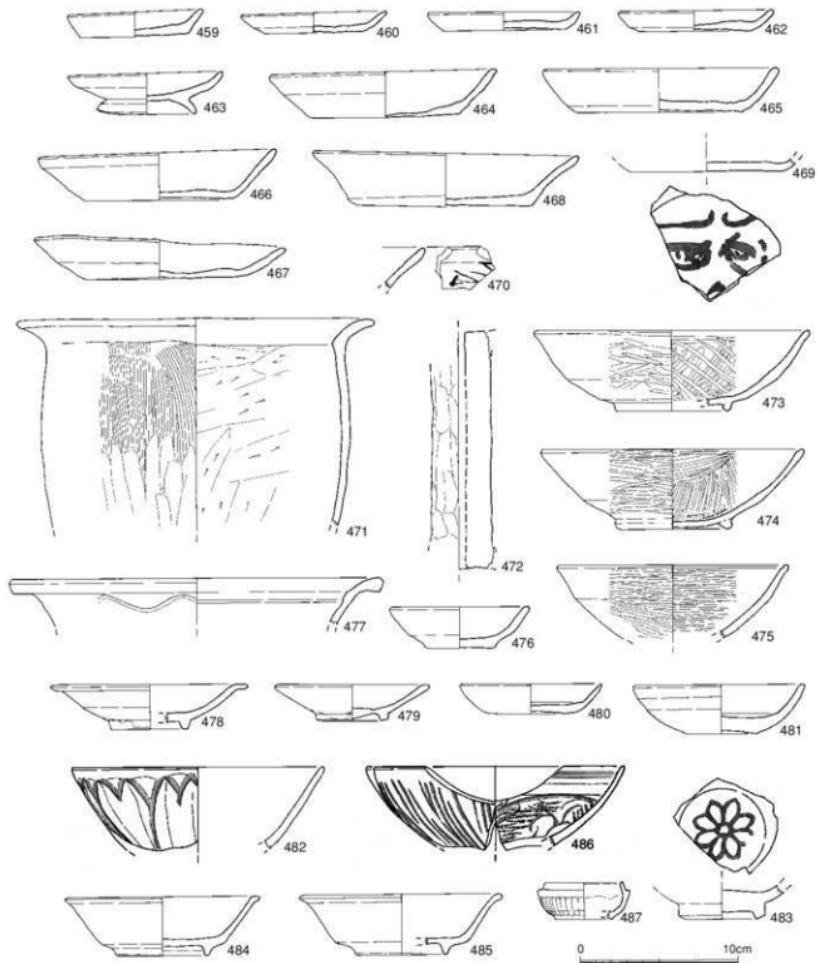


第35図 ピット出土遺物実測図(3)(1/4)

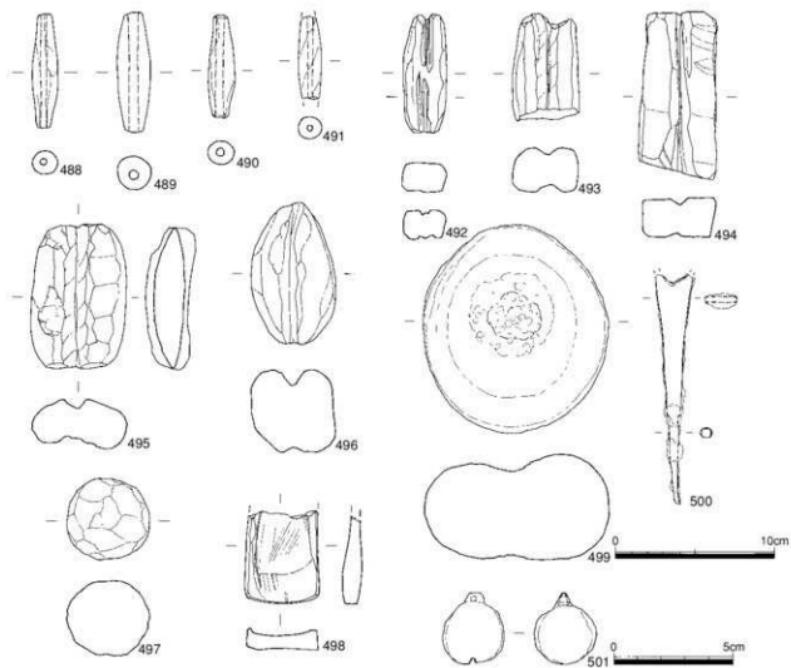
#### 4) その他の遺物(第36~38図)

最後に遺構検出面や搅乱からの出土遺物についてとりまとめて報告を行う。

459~472は土師器である。459~462は完形に近い回転糸切り底の小皿で、いずれも板状圧痕を有する。463は口径9.7cmの小皿で、ヨコナデにより内湾する高台を付す。464~470は坏である。470を除き、板状圧痕を有する回転糸切り底である。469は外底部に、470は口縁部外面に墨書きが認められる。469は人面土器であろう。471は復元口径30.0cmを測る古代の甕で、「く」字状を呈する口縁部は緩く外反し、ヨコナデを施す。胴部外面は刷毛目調整を行うが、下半は板状工具によるナデを加える。内面はヘラ削りで、頸部では横方向に調整し、口縁部との境界に稜を形成する。胎土には金雲母片が目立つ。472は器台の筒部で、外面はヘラナデによる面取り風の調整を行

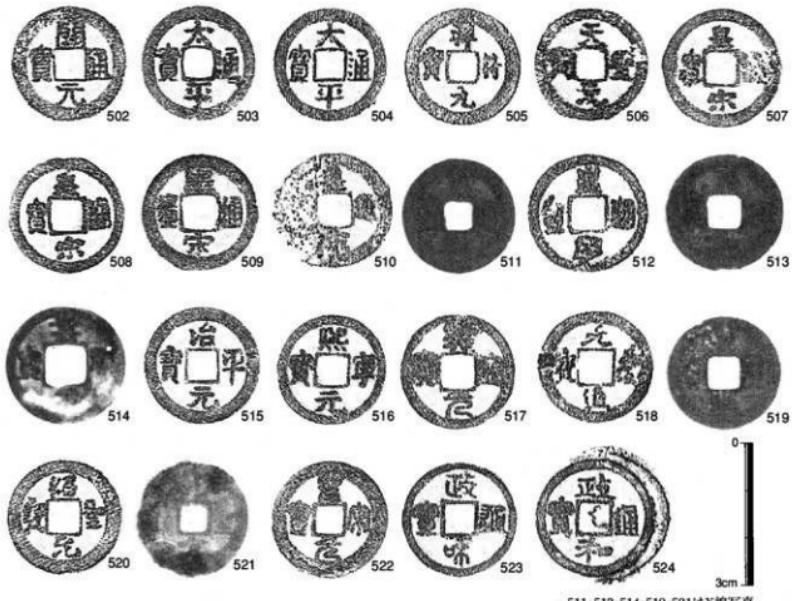


第36図 遺構検出時他出土遺物実測図(1) (1/3)



第37図 遺構検出時他出土遺物実測図(2) (499・500は1/3、他は1/2)

うため、鈍い稜が認められる。473～476は瓦器である。473～475は桶で、体部外面をミガキによって仕上げる。475は畿内産の瓦器で、口縁部内面に沈線を有する。ミガキの単位は細く、密に施される。476は皿で、外底部に回転糸切り痕を残す。体部はヨコナデおよびナデ調整を行う。477は高麗陶器の広口壺で、外反する口縁端部は肥厚する。外面にヨコナデを施し、頸部外面にはヘラ描きによる波状文を有する。胎土は精良で、器壁の内部は暗赤褐色を呈する。478～481は白磁皿である。478・479はⅢ類で、478は口縁部を外反させ、見込みの釉をカキ取らない。479の口縁部は直線的に延び、見込みの釉を幅広く輪状にカキ取る。480・481は外底部の釉を削り取るⅧ類で、体部は内湾気味に立ち上がる。前者は小形で、外底部に目跡を残す。後者は底部に器壁が厚い。482～485は龍泉窯系青磁である。482は碗II-b類、483は碗I類で、見込みに花文のスタンプが施される。484・485は坏III-1a類で、高台疊付きのみが露胎となる。486は同安窯系青磁碗I-1c類で、外面にやや太目の櫛目文、内面には櫛およびヘラ状工具による施文を有する。487は体部外面に菊弁の型押しを施す青白磁の合子身で、口縁部外面と外底部には施釉されない。488～491、496は土師質の土錘で、496を除き小形の管状を呈する。梢円形をなす496は溝を有する。492～495は滑石製の有溝石錘で、断面「V」字状の溝を削り込む。494は鋸引きによるものと考えら



第38図 遺構検出時他出土遺物実測図(3)(1/1)

れる。494・495は石鍋の転用品で、一部に煤が付着している。497は径3.5cmを測る砂岩製の石球で、叩打により球形に成形成する。498は滑石製石鍋を転用した方形の製品で、幅3.1cm、厚さ0.9cm、残存長4.0cmを測る。長辺には幅数ミリの淵を有し、中央部が窪む。硯を模造したものであろうか。499は圓石で、中央部の両面には叩打痕が認められ、円形状に窪む。径11.7～13.1cm、厚さ6.7cm、重量1,472.8gを測る。500は雁股式の鉄鍤で、先端部は欠損する。笠被は鋳化により不明瞭である。501は鋳化が著しい青銅製鉢である。頂部に錠を有し、高さ3.0cm、径2.6cmを測る。502～524は銅錢で、502を除き北宋時代の錢貨である。502は唐代「開元通寶」(初鑄年:621年)、503・504は「太平通寶」(初鑄年:976年)、505は「祥符元寶」(初鑄年:1009年)、506は「天聖元寶」(初鑄年:1023年)である。507～512は「皇宋通寶」(初鑄年:1038年)で、512は篆書、他は真書で鑄る。513は「至和通寶」(初鑄年:1054年)、514は「嘉祐元寶」(初鑄年:1056年)、515は「治平元寶」(初鑄年:1064年)である。516・517は「熙寧通寶」(初鑄年:1068年)で、前者の書体は真書、後者は篆書である。518・519は「元豐通寶」(初鑄年:1078年)、520・521は「紹聖元寶」(初鑄年:1094年)、522は篆書による「聖宋元寶」(初鑄年:1101年)である。523・524は「政和通寶」(初鑄年:1111年)で、前者は篆書、後者は分楷で鑄出される。524の背面には別の銅錢が鋳化により密着している。

### 3. 結語

今回の第63次調査で検出した大半の遺構時期については、例言に記した参考文献等の編年観を参考照し、本文中でそれぞれ述べたが、最後に本調査区での遺構の時期的な変遷を主眼としたまとめを行っておきたい。

出土遺物の中でも最も古く位置付けられるものとしては、8～9世紀代の土師器甕(471)があるが、遺構に伴わない搅乱出土である。箱崎宮創建以前の当該期の遺構は本遺跡内では皆無で、遺物に関しても第10次調査で同様に後世の遺構から土師器が出土しているに過ぎない。今後、遺構が検出される可能性は否定できないが、少數であろう。

本調査区における遺構の初現は12世紀前半から中頃で、出土遺物の組成は回転ヘラ切りおよび回転糸切り底の土師器が共伴し、白磁が主体となる。土坑ではSK002・007・009・010・019・266等が挙げられ、この内、SK007・009・010には細片の青磁も含まず、古相を示す。SK266は龍泉窯系青磁片2点を含むが、ヘラ切りが主体となり、同様に古く位置付けられよう。また、井戸ではSE014・028が挙げられる。前者は上面から底面までを一気に掘り下げ、水溜に曲物を据えるもので、11世紀後半から12世紀前半に本遺跡で検出例が多い。なお、この井戸以外では径0.7m前後の木桶が水溜として多用されている。また、後者のSE028は、一旦平坦面を設けた上で、水溜(木桶)を据えるための円形状の掘り込みを行うものであった。ピット状遺構では、SP257・345が代表例で、前者には高麗青磁(429)が伴う。

続く時期としては、土師器の外底部は回転糸切り底となり、白磁に加え、龍泉窯系青磁I類や同安窯系青磁が出現する12世紀後半で、土坑ではSK004・026が該当するが、井戸では該期に比定できるものはなかった。両者は土師器類が主体となる遺構であるが、後者は土師器小皿・壺を一括廃棄した土坑で、土師器口径が最大化する該期の典型的な法量を示す。

土師器の小形化の兆候が始まり、龍泉窯系青磁II類が加わる13世紀前半から中頃では、SE013・014・017・025、SK005が挙げられる。井戸は調査区の西側、B-2区およびA・B-4区周辺で数基が重複して掘削されており、その初現段階に相当する遺構となる。これらの井戸の検出状況は、ある一定期間にわたり、井戸崩壊の度、ほぼ同一箇所で掘削を繰り返した結果であるといえる。また、井戸や掘立柱建物と組み合わさる家屋群が街区等の秩序の中で経営された所産と想定され、これら井戸群の南北のいわゆる家屋が置かれていた可能性が高い。

更に小形化する土師器と龍泉窯系青磁III類や白磁IX類に代表される遺物の組成を指標とする13世紀後半から14世紀前半にかけては、残る井戸の大半、SE006・011・012・016・021・020・023等が設置されており、前代の13世紀前半から始まるピークを迎えるが、14世紀後半以降の遺構は近世に至るまで極少数である。本調査区と道路を隔てた西側の第3・5・16・51次等の西側砂丘緩斜面上の調査では、整地を伴う中世後半代の遺構が検出されており、砂丘尾根線により近い本調査区とは異なる様相が指摘できる。

「II. 遺跡の立地と環境」でも指摘したが、本遺跡では、12世紀中頃前後に砂丘尾根線から西側緩斜面の開発が進み、12世紀後半から13世紀には砂丘上で広く町場が形成される。また、13世紀後半以降、西側斜面の利用が盛んとなる。上記に延べた今回の調査成果もこれらの様相とよく合致する。今後は、立地によって異なる方位を有する構状遺構等から町割りのあり方を検討し、よりリアルな都市景観を復元する作業が必要となろう。

# 図 版



作業風景





(1) 調査区西側全景（北西から）



(2) 調査区東側全景（北西から）

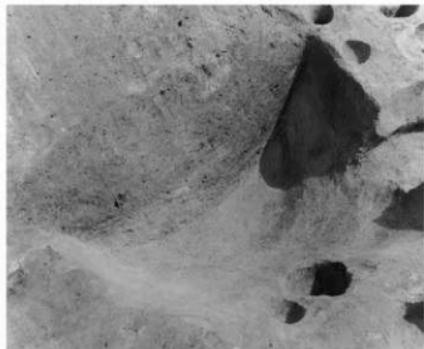


(3) 調査区南東部全景（南西から）

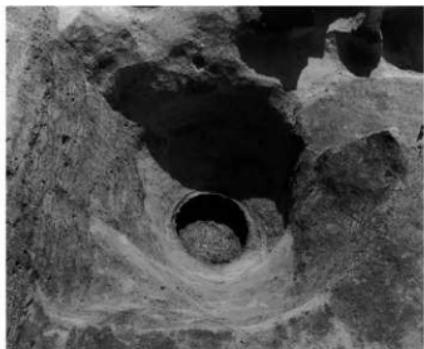
図版 2



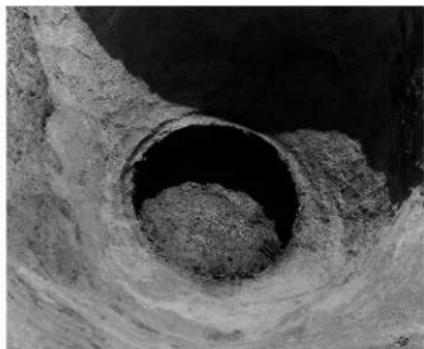
(1) SE001 (北東から)



(2) SE006 (北から)



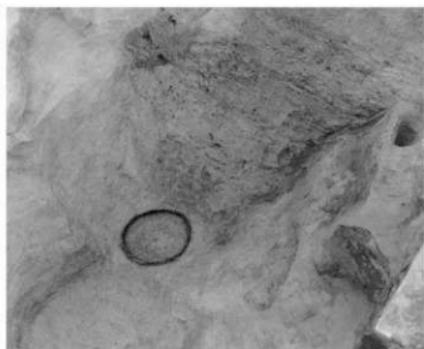
(3) SE011 (北西から)



(4) SE011 井筒 (北西から)



(5) SE012 (北から)



(6) SE013 (北から)



(1) SE014 (南西から)



(2) SE016 (南から)



(3) SE017 (北西から)



(4) SE018 (南東から)



(5) SE020 (南西から)

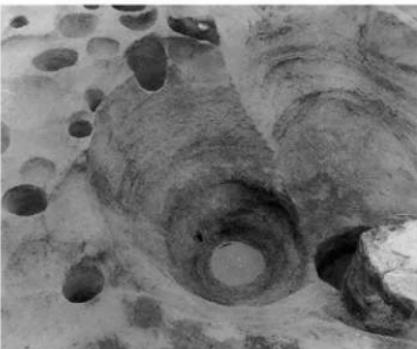


(6) SE021 (南西から)

図版 4



(1) SE023 (北西から)



(2) SE024 (南東から)



(3) SE025 (北西から)



(4) SK002 土層 (北東から)



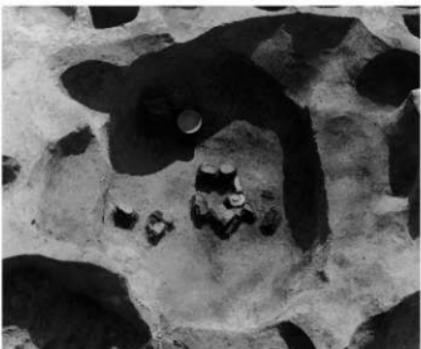
(5) SK002 (北から)



(6) SK004 (北から)



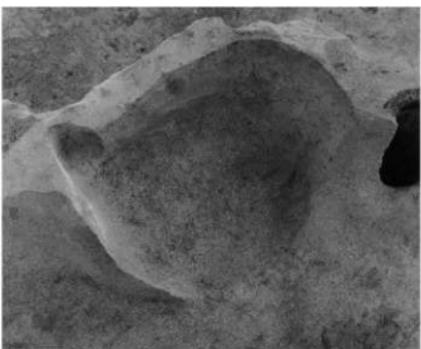
(1) SK007 (南西から)



(2) SK009 (北西から)



(3) SK010 (北西から)



(4) SK019 (北東から)

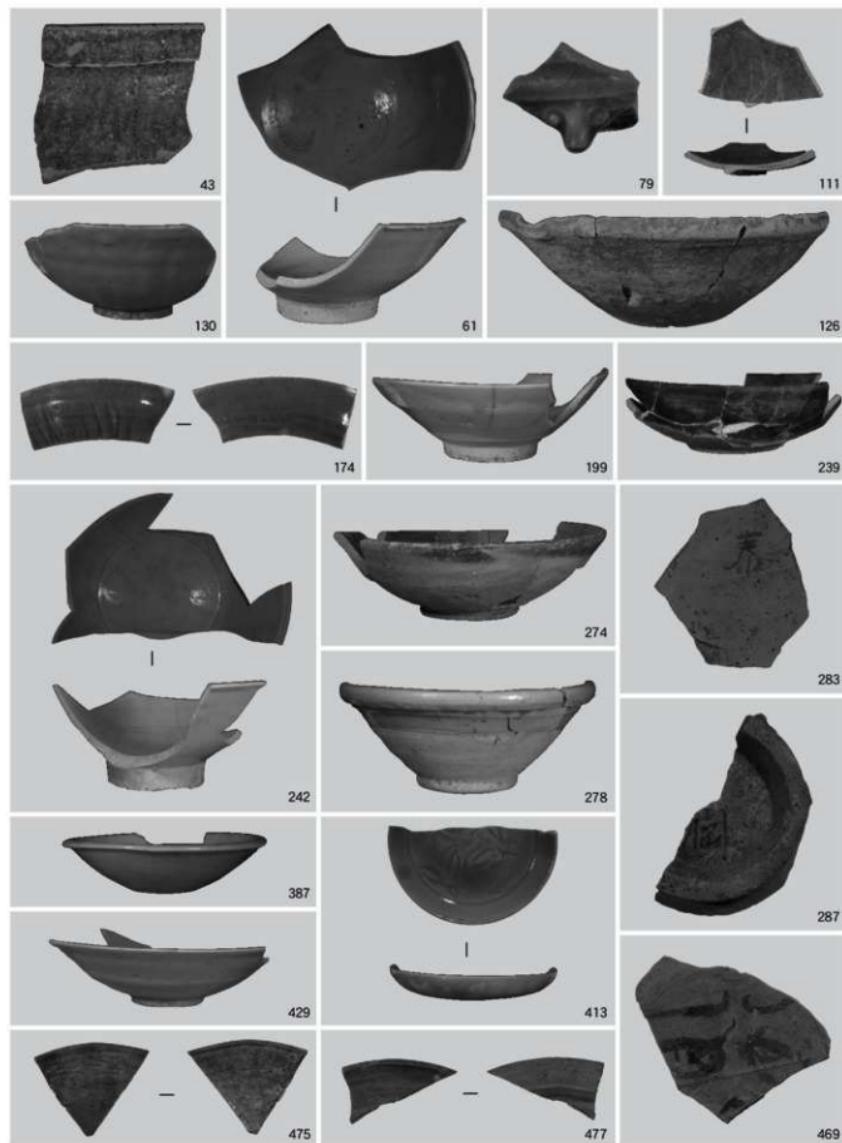


(5) SK026 (北西から)



(6) 調査区周辺風景 (西から)

図版 6



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はこざき41 一はこざきいせきだい63じちょうさほうこく一							
書名	箱崎41							
副書名	—箱崎道路第63次調査報告—							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1094集							
編著者名	榎本義嗣							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行機関	福岡市教育委員会							
発行年月日	2010年3月23日							
郵便番号	810-8621							
住所	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
電話番号	092-711-4667							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村 ：遺跡番号	(世界測地系)					
箱崎道路 第63次	福岡県福岡市 東区箱崎1丁目 2704, 2706-2, 2706-5	40131	2639	33° 26' 33"	130° 01' 25"	20080717 ～ 20081015	506.2 公館等 施設建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箱崎道路 第63次	集落	平安時代 鎌倉時代	井戸 土坑 ビット	15以上 10以上 多數	土器、瓦器、須恵器 国産陶器（常滑焼） 高麗窯磁器（高麗陶器、高麗青磁） 中国窯陶磁器（中国陶器、白磁、龍泉 窯系青磁、同安窯系青磁、青白磁） 瓦、土製品（土錘、瓦玉） 石製品（石錘、石錐） 金屬製品（銅錢、鉄錠、青銅製錘）	本調査区では、12世紀前半から集落化が開始され、12世紀中頃から13世紀にかけて土坡や井戸等が多数掘削されている。これは該期に砂丘尾根線から西側緩斜面が集落として利用され始め、都市化がすすむ本遺跡の状況によく合致する。 また、少量であるが畿内産瓦器や高麗窯磁器の出土は遺跡の性格を考察する上で、注目される。		

## はこざき 箱崎 41

—箱崎道路第63次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1094集

2010(平成22)年3月23日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092)711-4667  
印刷 金丸印刷株式会社  
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-46-1  
(092)621-4257

